

# カール・ロジャーズの生涯

The life of Carl Rogers

金原俊輔

Shunsuke Kanahara

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

11巻1号

Bulletin of the Research Institute of Regional Area Study

Nagasaki Wesleyan University

2013年3月

## カール・ロジャーズの生涯\*

金原俊輔\*\*

### The life of Carl Rogers

Shunsuke Kanahara\*\*

#### 要旨

本論文は、カール・ロジャーズの人生を概観し、加えて、彼の学説および学派の展開やそれらに対する支持・批判を展望したものである。

カール・ランソム・ロジャーズは、アメリカ合衆国の臨床心理学者だった。白人男性で、1902年1月、イリノイ州に生まれ、1987年2月、85歳だったときに、カリフォルニア州において心臓発作のため死去した。邦暦表示をすると、明治35年誕生、昭和62年没、である。ウィスコンシン大学農学部に入學したが、同大学の歴史学科に転学科し、1924年に卒業した。牧師を志してユニオン神学校の大学院に進んだものの、コロンビア大学大学院に移り心理学を専攻、1931年にPh.D. (哲学博士)の学位を取得した。ロチェスター児童虐待防止協会勤務したのち、オハイオ州立大学、シカゴ大学、ウィスコンシン大学、の教授を歴任した。大学を離れてからは西部行動科学研究所つづいて人間研究センターに所属した。クライエント中心療法の創始者として知られ、また、ベーシック・エンカウンター・グループの推進者としても著名だった。人間性心理学という学問的立場に身を置いた。1946年にアメリカ心理学会の会長に選出された。1956年、同学会の「特別科学貢献賞」を受賞し、1972年、同学会「特別職業貢献賞」を受賞した。妻のヘレンとの間に二人の子どもがいた。

#### キーワード

カール・ロジャーズ、非指示的療法、クライエント中心療法、来談者中心療法、ベーシック・エンカウンター・グループ、パーソン・センタード・アプローチ、人間性心理学

#### ロジャーズの人生

カール・ランソム・ロジャーズは、1902年1月8日、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市郊外の

オークパークに生まれた。白人男性であった。彼の「ロジャーズ」という姓は、日本ではロジャース、ロジャース、ロージャズ、あるいはロージャズと、いくつかの異なる発音・表記をされてきている。本論文では「ロジャーズ」を用いる。

父親のウォルターは建築学領域の工学博士号を所持する実業家で、母親のジュリアは主婦だった。ロジャーズは6人中4番目の子どもであり、兄が2人、姉がひとり、弟が2人、いた。一番上の兄はロジャーズより9歳年長のレスター、つぎに5歳年上の姉マーガレット、次兄は3歳年上のロス、そしてロジャーズ、5歳年下の弟ウォルター、最後に6歳年下の弟ジョン、の順だった。子どもたちのうち5人が男子だった。弟のウォルターが生まれるまでの5年間、ロジャーズは末っ子であり、家族にかわいがられた。

父も母も愛情豊かであったが、子どもたちに対してキリスト教プロテスタントのファンダメンタリズム (原理主義) に基づいた厳格なしつけをおこなった。

日曜日には必ず一家そろって教会にでかけ、また、毎朝食後に聖書からの引用を順番に読んで朝の祈りを行っていた (村瀬、保坂、1990、p.78)。

両親は飲酒やギャンブルを禁じ、ダンス・観劇・トランプなども認めなかった。そして家族間の強い絆を求め、子どもたちに勤勉さを要求した (ソーン、2003)。母親は子どもたちが炭酸飲料水を飲むことも許さず、読書すら憩いや興味のためにする場合は罪深いと教えていた (ドライデン、ミットン、2005)。久能 (1997) は、ロジャーズの生家の様子を「[マックス]ヴェーバーが描き出すプロテスタントの生活 (労働) 倫理にほとんど完全に染め上げられていると言ってよい (p.16)」と指摘している。

子ども時代のロジャーズは病弱で、痩せてお

\* Received February 27, 2013

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

り、泣くことが多く、家族からは繊細な男の子とみなされていた。両親はロジャーズが早逝してしまうのではないかと心配し、本人に心配を伝えたことがあった (Cohen, 1997)。家族はよくロジャーズをからかったが、からかいは度が過ぎたものになる場合もあった (ソーン、2003)。

ロジャーズは本を好み、とくに冒険物語を愛読していた (飯長、1983)。ニワトリの世話をし、卵を売ったりした (飯長、2011)。

近所に少数の友だちがおり、そのうちのひとりにヘレン・エリオットという女の子がいた (畠瀬、見藤、1985)。のちにロジャーズの妻となった。

1954年にノーベル文学賞を受賞したアーネスト・ヘミングウェイが近くに住んでいた。ロジャーズより2歳半年長だった。しかし、ロジャーズはヘミングウェイとの面識はなかったと思われる。

ロジャーズが小学校に入学した際、彼の読書量は同級生たちの数年先に達していた (ソーン、2003)。急遽、飛び級制度が適用され、ロジャーズは小学校入学2日目から2年生に進級した (飯長、1983)。2年生のクラスには前述のヘレンが在籍していた。ヘレンは、ロジャーズが、

恥ずかしがり屋で、繊細で、社交的でない子。公園で遊んだり、スポーツをしたりするより、本を読んだり空想の世界に浸っているのが好きな子 (諸富、1997、p.26)。

だった、と語っている。

小学校時代、ロジャーズは成績が抜群に良く、たびたび教師たちからほめられた。いっぽう、学業をとくに重視していなかった両親は彼の成績をほめなかった。小学校に在学中、一度だけ、ロジャーズは同級生となぐりあいの喧嘩をした (久能、1997)。

中学校に入ってから、社会の誘惑に子どもたちを触れさせまいとする父母の目がきびしく、ロジャーズは自由な時間をもてずに学校や地域で孤立していた (ソーン、2003)。友だちを欲する気持ちは強かった (ロジャーズ、2007)。

1914年、ロジャーズが12歳だったときに、父親がシカゴ市西部にあるウィートンの農園を購入し、それに伴って一家は転居した。農園は広さが200エーカー (約25万坪) 以上あった (Cohen、

1997)。寝室が8室、風呂が5つ、テニスコートもある邸宅がついていた (諸富、1997)。農園移転は、両親が都市生活の墮落から子どもたちを遠ざけるためにおこなったことだった (ドライデン、ミットン、2005)。農園でロジャーズは農業に興味をいなくようになり、家畜・家禽を育て、さらには植物にも関心を向けた。彼は、少年時代に観察した地下室の貯蔵箱のジャガイモについて、以下のような描写をのこしている。

それは小さい窓から2メートルも地下に置かれていました。条件は全くよくないのにジャガイモは芽を出そうとします。春になって植えると出てくる緑の健康な芽とは似ていない青白い芽を出すのです。この悲しいきゃしゃな芽は窓からもれてくる薄日に届こうと、60センチも90センチも伸びるのです。[中略] 逆境にあってそれらの芽は成長しようともがいているのです (ロジャーズ、2007、p.105)。

ロジャーズは両親から農園で作業や雑用をする責任をもたされた (ナイ、1995)。彼は他人にアドバイスを求めず、専門書を読んで必要な知識を得た (飯長、1983)。

1915年、13歳のころから、ロジャーズは蛾が好きになって採集しだした。

1917年、15歳だったときに、父親の仕事を手伝った。ロジャーズは広大な建設現場で馬に乗り労使間のメッセージを伝達する係を務めた (ロジャーズ、ラッセル、2006)。

高校時代、入学したオークパーク高校においてもロジャーズの学業成績はよかった。けれども、学校を2回転校し、そのうえどの学校にも遠距離通学をしたため種々の学校行事に参加することができず、友人をつくれなかった (Sharf、2000)。

依然としてきびしい両親のもと、高校生のロジャーズはデートを1回しか経験しなかった (ロジャーズ、2007)。学校のパーティにカップルで出席しなければならず、彼は「遠くから見ていて好きだった (ロジャーズ、ラッセル、2006、p.30)」女子生徒に同伴を願いでたのだった。承諾してもらった。ロジャーズは、もし相手に承諾してもらえなかったら自分はどうしたかわからなかった、と大人になって述懐した (久能、1997)。なお、デートは2回だったという説もある (ソーン、

2003)。

ドーナグロブ高校を経てナパビル高校に移った。ナパビル高校では学級委員長に推された(ロジャーズ、ラッセル、2006)。

1919年、ロジャーズはナパビル高校を卒業し、ウィスコンシン大学農学部に入學した。専攻は農業科学であった。彼の大学入學は1920年だったとする文献も少なくない(例:Cohen, 1997)。ウィスコンシン大学は、1849年に創設された、ウィスコンシン州マディソン市にある州立大学だった。ロジャーズの両親も3人の兄弟もこの大学で学んだ。ロジャーズはすぐ上の兄であるロスとともにYMCAの宿舎に住んだ。

大学1年次、ジョージ・ハムプレイ教授が指導する農学部生のグループ「農学トライアングル」に参加した。ハムプレイ教授は、学生たちを縛らず、自主性を重んじる指導をおこなっていた。

ロジャーズは弁論部にも入部し、人前で話しをする訓練を受けた。本人の回顧に、

学生だったとき、論客でした。闘争的ではないのですが、論争では結構有能な戦い手で、それを楽しみました(ロジャーズ、ラッセル、2006、p.171)。

というものがあがるが、この回顧はおそらく弁論部時代のことだろう。

ロジャーズは大学に入學してから年上の女性といる際にありのままの自分をだしやすいことに気づき、上級生の女性たち数名とつきあった(ロジャーズ、2007)。最初に交際した相手は幼なじみのヘレン・エリオットだった(ロジャーズ、2001)。ヘレンは同じウィスコンシン大学の芸術専攻の学生だった。ロジャーズよりも8か月年上で、3センチほど背が高かった(ロジャーズ、ラッセル、2006)。以後2年間、ふたりは200通以上の手紙のやりとりをした(飯長、1983)。

1920年、大学1年次の終わりごろまでにロジャーズは牧師になる決意を固め、牧師職に益すると考えられる歴史の勉強に励みだした(ドライデン、ミットン、2005)。アイオワ州でひらかれた「学生宗教会議」に参加し感激したことが牧師をめざしだした一番の理由だった(ロジャーズ、2001)。

ロジャーズとラッセル(2006)の共著『カール・ロジャーズ 静かなる革命』に、この年のロジャーズの写真が挿入されている。水着姿で、か

なり痩せており、顔が細く、明るい笑顔をみせている。

1922(大正11)年、ロジャーズは「世界キリスト教学生会議」に出席するアメリカ学生代表12人のうちのひとりに選ばれ、船で中国の北京に向かった。ロジャーズ自身の記憶では、学生代表は12人ではなく、10人だった(ロジャーズ、ラッセル、2006)。ロジャーズは中国旅行出発直前に恋人のヘレンにプロポーズした。ヘレンは牧師の妻となることに躊躇し、返事はロジャーズが帰国してから、になった(諸富、1997)。

半年以上の長い旅行だった。目的地である中国のほか、日本、香港、フィリピン、の諸国も訪問した。日本には往路・復路の2回立ち寄った。往路で寄港したのは横浜だった。アメリカ西海岸のサンフランシスコから横浜まで21日かかった(ロジャーズ、ラッセル、2006)。

中国では、会議に出席しただけではなく、地方都市の大学を訪問して講演したり、ショッピングを楽しんだりするなど、充実した日々をすごした。同時にキリスト教に対する疑問もめばえだした(ロジャーズ、ラッセル、2006)。中国にいたときにウィスコンシン大学から「成績最優秀者」になった旨の連絡が届いた。

旅行中にロジャーズは一貫して『中国旅行日記』を書いた。

復路、長崎に寄港した。土地の女性労働者たちを眺める機会があった。

船の階段に列を作って並び、バケツリレーで手渡ししながら、女性の力だけで石炭を満載していたことです。その時のことを覚えているのは、石炭を積むのにもう一寸よいやり方があるのではないかと思ったからです(島瀬、見藤、1985、p.34)。

以上のように語り、「長崎が歴史上有名な町になるとは思ってもいませんでした(同)」とつけ加えた。「長崎が歴史上有名な町になる」、この言葉は、23年後、長崎市が原爆被爆地になったことを指す。

復路の日本では富士登山もした。日記には、

6時に頂上に着き、みんなは2時間遅く到着した。雲が晴れると、素晴らしいパノラマが広がった。高い山々、川、村々、そして海が美しい。小さな雲が山の上にたなびいて、それが、ずっと、ずっと下にある—なんというか、味わったことのない感覚。世界全

体の上にいる感覚（ロジャーズ、ラッセル、2006、p.62）。

景色に陶然となった様子が記されている。

アメリカに帰国後、彼の『中国旅行日記』は出版された。ロジャーズにとって初めての出版物だった。

ロジャーズはアメリカで十二指腸潰瘍を患い、約5週間入院した。入院中、ヘレンが見舞いにきた。二人の距離は近くなった。退院してからロジャーズはしばらく大学を休学し、自宅で療養した。両親に「働くことが治癒になる」といわれ、働きながら治さざるを得なかった（村山、田畑、1998）。

休学中、ウィスコンシン大学の通信教育で「心理学入門」を受講した。これがロジャーズの心理学との最初の出会いになった。ウィリアム・ジェームズの著作が教科書として使われていた。ジェームズはプラグマティズム哲学を背景にした心理学者で、すでに故人であったが、心理学の領域ではアメリカを代表する人物と目されていた。ロジャーズにはその教科書は退屈なものだった（飯長、1983）。

復学後、彼は専攻を歴史学に変更することにし、転学部して歴史学科に移った。当時、歴史学科が何学部の学科であったかは不明だが、2013年現在は教育学部内に入っている。

この年にロジャーズとヘレンは婚約した。ロジャーズは婚約に恍惚とするほどの幸せを感じた（ソーン、2003）。

1924年、ウィスコンシン大学を卒業した。卒業時は中世史を研究しており、卒業論文の題名は「宗教の権威に関するマルティン・ルターの思想の発展」だった（諸富、1997）。

卒業2カ月後の8月、22歳だったときに、ロジャーズはヘレンと結婚した。双方の両親はそろって「ふたりが仕事に就き生活が安定するまで結婚すべきではない」と反対したが、反対を押し切った結婚だった。ロジャーズは自分の両親から結婚祝いとして2500ドルを贈ってもらった。当時のアメリカにおける男性勤労者の年収は約800ドルだった（Cohen、1997）。

夫婦はニューヨーク市に小さなアパートを借りて住んだ。

同じ1924年、ロジャーズはニューヨーク市のユニオン神学校の大学院に入学し、キリスト教プロテスタントの神学を学びだした。ユニオン神学校

は、1812年に創設された長老派教会の牧師養成校で、進歩的な校風で知られ、アメリカ宗教界をリードする存在だった。ロジャーズの両親は、ユニオン神学校がファンダメンタリズムの学校ではなかったので、不本意だった（Cohen、1997）。ロジャーズは神学校で2年間を過ごした。旧約聖書、説教術、哲学、ギリシャ語、などの諸講義を受講した。

1925年、ユニオン神学校大学院1年次終了の際に、ロジャーズは「成績優秀者」に選ばれた（Cohen、1997）。

この年の夏、彼は数か月間、バーモント州の田舎にある小さな教会で牧師職の実習をした。当時、牧師の説教は40分から1時間ほどつづくものだったが、ロジャーズはそうのように長い時間をかけて自分の考えを他者に伝えることにためらいをおぼえた（ソーン、2003）。妻のヘレンが地元の少女たちを集め「ガール・クラブ」を組織してソフトボールを指導するなど、実習中の夫を支えた（ロジャーズ、ラッセル、2006）。

ロジャーズはユニオン神学校大学院で心理学も受講した。ハリソン・エリオットそして夫人のグレース・エリオットという2名の心理学教員から他者を心理学的に援助する活動が職業として成立し得る可能性を教わった。心理学に興味をもった。

同年、ロジャーズは自分が特定の宗教に束縛される人生を望んでいないことを自覚するようになった。そして、ユニオン神学校の向かい側にあったコロンビア大学教育学部で、聴講生として心理学を中心に勉強しだした。受講した科目のなかには、リタ・ホリングワースが教える臨床心理学やウィリアム・キルパトリックが担当する教育哲学が含まれていた。

1926年、長男のデイビッドが誕生した。ロジャーズ夫妻はデイビッドを当時流行していたジョン・B・ワトソンの行動主義心理学にしたがった育児法で育てようとした（ソーン、2003）。ワトソンは1913年に「心理学は科学を志向すべき」という行動主義宣言をおこなった心理学者である。後年、デイビッドは医師になり伝染病の研究をした。

この年、ロジャーズはユニオン神学校大学院を中退し、コロンビア大学大学院教育学研究科に転学した。専攻は臨床心理学・教育心理学だった。コロンビア大学は、1754年に設立された、アメリカ

カ合衆国で5番目に古い大学である。全米屈指の名門校で、いわゆる「アイビー・リーグ」のひとつに数えられる。

歴史学科卒業生であったロジャーズは心理学の基礎知識が十分ではなかった。しかし、彼は大学院生であったため、心理学の入門的な諸講義を受講する必要がなかった。心理学知識の欠如は以降のロジャーズの弱点になった (Cohen, 1997)。

コロンビア大学では行動主義心理学の領域で名高いエドワード・ソーンダイクが教壇に立っていた。ロジャーズはソーンダイクの講義を受講したものの、感銘を受けなかった (ロジャーズ、ラッセル、2006)。

時期がいつであったかは不明であるが、ロジャーズは大学院時代に知能テストを受検した。知能が高いと想定される同級生たちと比較してもトップレベルの知能指数を示した (Cohen, 1997)。

1927年、ロジャーズはコロンビア大学に籍をおいたまま、ニューヨーク市児童相談研究所のインターンになった。1年間の勤務だった。奨学金を申請したところ、申請がとおった。支給額は1200ドルであった。いっぽう、精神科医への支給額は倍以上の2500ドルであった。「心理学者には医師の半額程度しかあたえない」という考えかたに彼は反発した。支給元に激しい抗議の手紙を書いた結果、例外として、ロジャーズに精神科医と同額の支給がなされることになった (泉野、2005)。この件に関し、ロジャーズが研究所における他の心理学者たちの受給額も高めたかのような説明がなされる場合があるが (例：小松、1999)、事実は異なり、彼は自分の受給額だけを高くしたのだった。本件で窺われるロジャーズの自分を重視する性向のせいで、Cohen (1997) は、彼の交友関係はどれも1年ぐらいいしか継続しなかった、と記述した。ロジャーズ自身、

私は当時も今でも一人で生活するタイプの人間です。私は友達は多くない方です (島瀬、見藤、1985、p.49)。  
こう述べている。

ニューヨーク市児童相談研究所では職員が少年たちに主観的・情緒的に関わることが重視されていた (飯長、1983)。客観的な心理検査を重んじるコロンビア大学と正反対だった。研究所は学派としてはシグムンド・フロイドの精神分析学に依拠していた。ロジャーズは「フロイト理論は客観性がなく、事実を実証することに関心がない (ロ

ジャーズ、ラッセル、2006、p.95)」、このように考えて、幻滅や憤りを覚えた。彼は精神分析学とつながりがある「ロールシャッハ検査」にも興味をもたなかった。なお、彼は、フロイド本人には一定の敬意をいだいており、その後継者たちのほうを批判していた (ロジャーズ、ラッセル、2006)。

同じ年、ロジャーズが勤務していた児童相談研究所は、アルフレッド・アドラーを研修会の講師として招いた。アドラーはオーストリア在住の医師で、「個人心理学」の樹立者として知られており、当時、しばしばアメリカで活動していた (フーバー、ホルフォード、2005)。研修会では、アドラーは用意された特定少年に関する50ページ以上の分厚い資料をほとんど無視し、主要な問題が書かれた箇所だけを読んで、自分ならばどう対応するかを語った (ロジャーズ、ラッセル、2006)。ロジャーズはアドラーの考えを受け入れることができなかった (諸富、1997)。そのころのロジャーズは、

研究所のかなり厳格なフロイト派のアプローチに慣れていたので [中略] 私はアドラー博士の、子どもと親にじかに関わる、非常に直接的でだまされたと思うほどシンプルなやり方にショックを受けた。私がアドラー博士からどれほど多くのことを学んだかを認識するまでにはしばらく時間がかかった (ホフマン、2005、p.265)。

という状態だった。ロジャーズはアドラーと1928年にも接点をもった (ホフマン、2005)。

1928年、ロジャーズはコロンビア大学大学院で文学修士号を取得した。引きつづき、彼は同大学院の博士課程に在籍した。

同年、ロジャーズは、ニューヨーク州ロチェスター市のロチェスター児童虐待防止協会の児童研究部で働くことになった。協会の採用面接が終わった日、彼は、たまたま目についた8500ドルの庭つきの家を、その場で購入した (諸富、1997)。同協会であちこちの機関から送致されてくる非行少年や恵まれぬ境遇の子どもたちのカウンセリングをおこないだした。薄給であったが、ロジャーズは仕事に励み、1939年まで12年間にわたって勤務した。何千人もの少年たちと関わった (飯長、1983)。カウンセリングを終了した少年たちが非行を繰り返す例を多く経験し、彼は既存のカウンセリング理論に限界を感じるようになった (富田、1992)。

1929年、上記ロチェスター児童虐待防止協会の児童研究部長に昇進した。当時のロジャーズに関して、同僚だったクックという女性は、

温和な、議論好きの、すてきな方でした。

けっして性急なことはなさらず、堅実で、何事も考え抜かれる方でした。部下のサイコロジストの指導、幼稚園の先生の指導、郡庁関係のお仕事と、非常にたくさんの仕事をしておられました（小野、1966、p.416）。

敬意を込めて回想した。

1930年、長女のナタリーが誕生した。ナタリーは心理学を専攻するようになり、芸術療法家として父ロジャーズの活動を手伝った。

1931年、ロジャーズ29歳のときに、コロンビア大学大学院においてPh.D.（哲学博士）の学位を取得した。博士論文のタイトルは「9歳から13歳の児童の人格適応の測定」だった。この際に彼が開発した測定法は「ロジャーズ人格適応検査」という名称で評判になり、YMCA出版部の刊行物として1970年代まで販売されていた（諸富、1997）。

1933年、ロジャーズの兄のロスが死去した。

1935年、ロジャーズはコロンビア大学およびロチェスター大学で教えだした。非常勤講師だった。

1936年、ロチェスター児童虐待防止協会はotto・ランクを講師に招き、職員たちのために3日間のセミナーを開催した。ランクはロジャーズより20歳ほど年上で、フロイドとはやや異なる精神分析療法家として著名だった。ロジャーズもセミナーに参加した。ロジャーズは約20年後、心理療法において「共感的理解」が必須であると提唱するようになるが、心理療法での共感の意義については精神分析医のシャーンドル・フェレンツィがすでに着目していた。フェレンツィと親交が深かったランクはセミナーでフェレンツィの考えを語り、それがきっかけとなってロジャーズも共感的理解を重視するようになったのではないか、という推測がある（末武、1997）。

ロバート・クレイマーもロジャーズがランクから強い影響を受けた可能性を指摘している。

「クライアント (client)」という言葉も、「共感 (empathy)」の概念も、すでに1930

年代前半からランクが使用していたものであり（彼の母国語であるドイツ語ではKlientならびにEinfühlung）、また彼は「真のセラピーはクライアントを中心に回らなければならない」（1935年の講演）とも語っていたという。これらの概念や着想はランクを通してロジャーズにもたらされた可能性が高く、また他にもロジャーズにおける一致、無条件の肯定的配慮といった考えや、フロイトに対する懐疑的で批判的な見解などにもランクの影響がみてとれるとクレイマーはいう。[中略] 1939年のランクの死の直後からロジャーズは臆することなくクライアント中心療法の提唱へと邁進していった事実を考えると、その影響関係の深さや運命性には否定できない側面が認められるといえよう（末武、2004、p.251）。

ロジャーズはまた、ランクの弟子であったタフトからの影響も受けていた。

ロジャーズが、自分の考えの形成は、ジェシー・タフトによるところが大きいこと、その当時ロジャーズは「ランク派の考えに染まっていたこと」を公に認めたのは、ずっと後になってのことです（ソーン、2003、p.13）。

この年、医師になった弟のウォルターが、ロジャーズが働いていたロチェスター市で勤務を助した。

1937年、または1938年、正確な年は不詳だが、ある母親が問題行動を示す息子を連れてロチェスター児童虐待防止協会に来所した。ロジャーズが母親のほうの担当カウンセラーになった。ロジャーズ（2007）によれば、

面接では、おだやかな態度で彼女の拒否的な態度が少年に影響を与えていることを見つめるように根気よく援助しました。しかし、役立ちませんでした。およそ12回の面接後、私は彼女に2人とも熱心に取り組んだけれど何も得ていないと思うと告げ、面接を打ち切った方がよいと思うと話しました。彼女は同意しました。そして、彼女は面接室から出ていこうとして振り返ると、「ここでは、おとなのカウンセリングをなさらないのですか」と聞くのです。面喰らいつつ、時には取り扱うと答えました。すると今立ち上がったばかりの椅子にもどって、夫との関係が非常に難しいこと、助けてもらいたいと願っていること等を語り始めたのです。私は打ちのめ

された気がしました。私が彼女から聞き出していきいかにまとまった成育歴とはショックを受けるほど違っていたのです。私はどうしていいかわからないまま、ただ聞いていました。そしてさらに面接が続き、彼女の夫婦関係が改善されただけでなく、彼女が真実で開かれていくにつれて少年の問題行動が消えていったのです (p.32)。

これはのちのクライアント中心療法につながってゆく経験だった。

1939年、ロチェスター児童虐待防止協会が新たに「ロチェスター児童相談所」として独立する際、同協会の児童研究部長を約10年間務めていたロジャーズが所長職に就くことになった。ところが、この人事に対して精神科医たちから反対があった。「メンタルヘルス施設の責任者は精神科医であるべきであり、心理学者がなるのは妥当ではない、心理学者が精神科医を雇用する立場に立つべきではない」というのがおもな理由だった。前年からの1年間にわたる会議・折衝の結果、結局、1939年に、ロジャーズが所長に就任することが決定した (泉野、2005)。

同年、ロジャーズ (邦訳書では「ロージャズ」と表記) が書いた最初の専門書となる『問題児の治療』(1966) が出版された。ロジャーズは同書のなかでカウンセラーに必要な4つの資質を論じた。それらは、客観性、個人の尊重、自己理解、心理学的知識、であった。このうちの前者3つが、やがてロジャーズが提言しカウンセリングの世界で有名になる「共感的理解」「無条件の肯定的関心」「自己一致」の概念に結実していった (飯長、1983)。

『問題児の治療』書の価値が認められ、ロジャーズはオハイオ州立大学から迎えられることになった。誘いを受けた際、彼は「びっくり仰天して喜んだ (ソーン、2003、p.17)」。

12月、ロジャーズ一家は、大吹雪のなか、オハイオ州に向かって出発した。

1940年、オハイオ州立大学の正教授として働きだした。同大学はオハイオ州コロンバス市にあった。1870年に創設された大型の総合大学だった。大学勤務に関して、ロジャーズは後年、自分は最初から大学の正教授となり、そのおかげで上司に遠慮する必要がなく自由自在に活動できた、大学勤務をめざす他の人たちも同様な職の得かたがよ

いと思う、旨の意見を述べた (村山、田畑、1998)。

オハイオ州立大学には4年間勤務した。ロジャーズは学部生を対象とした講義はもたず、担当講義はすべて大学院生相手だった (ロジャーズ、ラッセル、2006)。

大学院教授としてのロジャーズは教育をするにあたって非指示的であった。彼は非常に人気があった。

学生からの人気、ロジャーズのその後の異様なまでの影響力の高まりに大きく関係しています。ロジャーズは学生に対して、いつも敬意と励ましに満ちた態度をとっていました。学生たちを自分と対等の人間として扱い、しばしば学生に自分の仕事を評価させました。ロジャーズがつくりあげたこの学習環境の中で、学生たちは急速に自信を獲得することができました。この学生たちがひいては、絶大な支持者となり研究仲間となっていたのです (ソーン、2003、p.20)。

大学院生たちはしばしばロジャーズ宅を訪ね、楽しいひとときをすごした (飯長、1983)。顔ぶれのなかにバージニア・アクスラインもいた。女性で、博士課程の大学院生だった。アクスラインは有力な遊戯療法家に成長した。「親業」で知られるようになるトーマス・ゴードンもいた。

この1940年から、ロジャーズはカウンセリングを受ける人を「患者」ではなく「クライアント (来談者)」と呼びだした。カウンセリングを受ける側とカウンセリングを進める側が相互に関わりあうことを意味する言葉であった (チューダー、メリー、2008)。クライアントは、日本では「クライアント」と発音・表記される場合もある。

ロジャーズはオハイオ州立大学のキャンパス内にカウンセリング・サービスを設立して、カウンセリング研究とカウンセラー養成も始めた (ドライデン、ミットン、2005)。カウンセリング研究では、受容と共感が提供されているカウンセリングの場合には一定の順序でクライアントに変化が起こる傾向に注目した (ナイ、1995)。また、カウンセラー養成においてスーパービジョンを実施したが、これは初心者教育にスーパービジョンが取り入れられた嚆矢ではないかといわれている (飯長、1983)。スーパービジョンとは「監督・指導」のことである。

さらに、この年から、ロジャーズと学生たちはカウンセリング過程を録音しだした。当時の録音技術はまだ発達途上であったものの、ロジャーズ

はいち早く最新技術を導入したのだった。

仰々しい録音装置の前でカウンセリングを行い、「フォノグラフ・ディスク」という盤に録音したのである。[中略]たいへんな労力を要した。当時の録音性能では、一つの盤に、最大3分の録音しか可能ではなかったのである。そこでロジャーズは数台の録音機を準備して、1分ずつの時間差で録音を行った。そのために、数名の盤載せ係が必要となったり、ディスク（レコード）の溝にほこりが入り込むと聞けなくなるので、数名のレコード拭き係も必要となった。さらに、レコード盤の内容を書き起こすステノグラファーやタイプストなども研究のために雇用された（池見、1995、p.80）。

ロジャーズたちは録音したカウンセリング内容をクライアントの許可なく発表し、自分たちのそのような行為を正当化していた（Cohen、1997）。

録音にまつわる別のエピソードであるが、ロジャーズは自分のカウンセリングを精神分析学派のカウンセリングと比較研究することを希望して当該学派に協力を申し込んだ。しかし、「見習い生のものであれば録音できる」という返事で、結局拒絶された（ジェンドリン、2006）。

同年12月、ロジャーズはミネソタ大学で「心理療法におけるいくつかの新しい発想」と題する発表をおこない、指示的ではなく、相手に成長が生じるような非指示的な治療の重要性を語った。発表中、彼は指示的方法を採るミネソタ大学のウィリアムソン教授の面接報告を本人の眼前で引用・批判した（ドライデン、ミットン、2005）。10年近くのち、1949（昭和24）年に渡米した伊東（1995）は、

当時のアメリカのカウンセリング界を支配していたのはミネソタ大学であり、その学生カウンセリング・センターは、アメリカ中の大学の学生相談所のモデルになり、カウンセリングの理論としては、その大学のウィリアムソン（Williamson, E. G.）の唱える「臨床的カウンセリング」が広く全国に浸透していた。ミネソタ大学出身者にあらざればカウンセラーにあらず、というほどの勢力をもっていた（p.47）。

如上の情勢を見聞した。ウィリアムソンはそれほどの権威であった。ウィリアムソンはロジャーズが批判することを知らず、発表を聞いて驚いた、と受けとめられがちである（例：末武、2005）。し

かし、ロジャーズが当日批判をするであろうことは、それまでの彼の主張などからウィリアムソンも聴衆たちも予想していたらしい（Cohen、1997）。

ロジャーズの考えでは、この日の発表をもって、自身が半生をかけ主導するようになるクライアント中心療法が誕生した（飯長、1983）。

1941年、アメリカ予防精神医学会の副会長になった。

1942年、ロジャーズは2冊目の専門書となる『カウンセリングと心理療法：実践のための新しい概念』（2005）を出版した。カウンセリングという語はアメリカで生まれ、おもに産業や教育の場で用いられており、他方、心理療法という語はヨーロッパ起源で、概して医学の領域で使われていた（桑原、2007）。ロジャーズは同書において、

最高度に強力に効果的なカウンセリングが、強力に効果的な心理療法と区別できない（ロジャーズ、2005、p.10）。

こう述べ、ふたつを同じものと視した。

ロジャーズはまた『カウンセリングと心理療法』内で忠告・意見などの指示はあたえるべきではないと強調し、その結果、彼の技法は「非指示的療法」と称されるようになった（富田、1992）。非指示的の英語は「Nondirective」である。これを略して、日本では非指示的カウンセリング法を「ノンディレ」または「ノンデレ」という場合がある。

ロジャーズの非指示的な療法観・カウンセリング観は、

カウンセリング関係とは、カウンセラーの側における受容的な温かさと、強制や個人的な圧力を与えないことが、相談者の感情や態度や問題の最大限の表現を可能にするような関係である。その関係は十分に設定され構造化されたものであり、とくにクライアントには時間や依存、攻撃的行動に制限が設けられ、またカウンセラーは自分に責任と愛情の制限を設ける。はっきりと設定された枠のなかでの、完全な感情表現の自由というこの独特な経験において、クライアントは自分の衝動や行動様式について、その肯定的なものも否定的なものも、自由に認知し理解する。それは他の関係においては見られないものである（ロジャーズ、2005、p.104）。

ロジャーズは『カウンセリングと心理療法』書

にクライアントの語を書き込んだ。臨床心理学の領域で当該語が広く使われるようになったのは同書以降である（飯長、1983）。本には「クライアント中心」という表現も登場した。

さらに、繰り返しや感情の反射などの技法も語られた。

クライアントの言葉をそのまま繰り返したり、感情を反射したり明確化したりするといった技法が紹介されたのも、ひとえにそういった「非指示的」態度の重要性を提示するためでした（園田、2003、p.141）。

クライアントを受けとめていることを伝えるための手段として、指示的な発言は避けられ、繰り返し・感情の反射が採用されたのだった。

ロジャーズ（2007）は面接で感情の反射を重視しだした経緯をつぎのように説明した。

ランク派の指導を受けたソーシャル・ワーカーから、一番有効なのはクライアントの言葉を通して認められる感情や情緒に耳を傾けることだと学びました。一番よい応答はその感情をクライアントに反射してやることだと教えてくれたのは彼女だと思います（p.120）。ここで言及されているソーシャル・ワーカーが前出のジェシー・タフトである。

ロジャーズは感情の反射をカウンセラー養成訓練でも用いていた（保坂、1998）。

非指示的な療法で中心的な役割を果たすものは傾聴である。これは、

相手に耳を傾けてきく、耳で聞いたことを心で受けとめる、相手に心を寄せて理解する、相手の言わんとするところを相手の準拠枠に添ってきちんと受けとめる、相手の話を無構えで評価しないできく等と様々に説明されるが、その要点は、相手の話に熱心に耳を傾け、表面的な事実にとらわれることなく、その背後にある気持ちに焦点を当て、相手の立場に立ってその心情を理解しようと努めるといったことである（沢崎、2005、p.154）。

傾聴は、ロジャーズ自身がカウンセリング中、自分に専門的知識が多すぎるためクライアントの話しを素直に聞いていなかったことに気づき、その反省から重視しだした（池見、1995）。

ロジャーズは『カウンセリングと心理療法』の3分の1以上を使い、ハーバート・ブライアンというクライアントとの面談の逐語記録を非指示的な療法の具体例として提示した。

木村（1997）は、非指示的療法を、ロジャーズ

がウィスコンシン大学で学んだ農学に関連させた。

ロジャーズは若い頃農業を研究していた。農作物は、人間が早く育つように焦っても、どうにもなるものではない。十分に肥料を与え、日光と水を適切に与えるしかない。ロジャーズの思想にはこの「植物成長モデル」が基本になっている。これは、すぐにクライアントの問題を権威的に解釈してやるよりも、暖かく見守り、育てて成長を待つというものである（p.109）。

このような見かたをする研究者はめずらしくなく、その結果、人間は（農作物も）外界と複雑な相互作用を果たしており、ロジャーズはそこを軽視・単純化している、こうした趣旨の批判もできるようになった（パートン、2006）。

非指示的療法の逆は「指示的療法」になる。当時のロジャーズが念頭においていた指示的療法とは、おもに職業カウンセリングであった（渡辺、1996）。

出版社は『カウンセリングと心理療法』が売れないと想定して出版に積極的ではなく、結局、2000部だけを発行した。つぎの年までの1年間で約1万部が売れ（Cohen、1997）、1979年までにアメリカだけでも11万部が売れた（飯長、1983）。1980年代末には100版に近い版を重ねていた（佐治、1988）。

1944年、ロジャーズはアメリカ応用心理学会の会長になった。また、同年、合衆国空軍の心理学顧問となり、奉仕機構連合のカウンセリング部長にもなった（Kelling、2001）。

夏に、ロジャーズはイリノイ州シカゴ市にある私立のシカゴ大学で客員教授として集中講義をおこなった。講義が好評だったため、その夏の終わりにはシカゴ大学から転任の話がきた（諸富、1997）。そしてシカゴ大学に移る運びになった。

上記の奉仕機構連合における仕事で多忙になりオハイオ州立大学で休講が多くなってしまったことも、ロジャーズが同大学を去る理由のひとつであった（Cohen、1997）。

1945年、ロジャーズはシカゴ大学に教授として着任し、同時に、大学のカウンセリング・センターの責任者となった。シカゴ大学は、創立は1890年と比較的新しいものの、アメリカの名門校のひとつである。研究大学であるため、学部生よりも大学院生の数のほうが多い（池見、1995）。

ロジャーズは大学まで歩いてゆける距離に居を構えた。在職中、しばしば昼ごろに帰宅し、妻と一緒に食事をとった (Cohen, 1997)。

ロジャーズはシカゴ大学カウンセリング・センターにオハイオ州立大学から既述のアクスラインや他の知りあいを呼び寄せた。ロジャーズ自身、カウンセリング・センターで毎週7名から10名のクライアントに会った。このカウンセリング・センターでカウンセラーをめざす学生たちの訓練にも携わった。

集団でのカウンセラーの訓練では、知的な理解よりも感情も含めて自由に討論するほうが有意義であるという経験が積み重ねられていった (小松, 1999, p.654)。

積み重ねは、後年のベーシック・エンカウンター・グループの基礎のひとつになった (一瀬, 1995)。ベーシック・エンカウンター・グループがどのようなものであるかについては1964年の項で詳述する。

カウンセリング・センターはシカゴ大学医学部精神医学科から敵対感情をもたれ、ロジャーズが連携を求めても歴代の精神医学科長はそれを拒絶した。あまつさえ、ある精神医学科長は「カウンセリング・センターは医師の資格なしにカウンセリングという医療行為をしている」と難じ、大学理事会に閉鎖を要求した。ロジャーズは学長のキンプトンに宛てて、心理学者のカウンセリングはすでに精神医学の世界で認められていること、シカゴ大学カウンセリング・センターはフォード財団より総額35万ドルの助成金を受けることになっており、この事実からも窺えるようにカウンセリングは社会的認知も得ていること、などを主張した手紙を送った。学長は要求を撤回するよう精神医学科長に提言し、学科長は承諾した (泉野, 2005)。

ロジャーズはシカゴ大学に1957年まで12年間勤務した。学部長の役職も経験した (ロジャーズ、ラッセル, 2006)。シカゴ大学にはロジャーズと同時期に精神分析学のハインツ・コフトが勤務していた。しかし、所属学部が異なっていたため、両者の出会いはなかった (岡村, 1997)。シカゴ大学での12年間はロジャーズが生涯において最も学問的業績をあげた時代といわれる (泉野, 2005)。

この年、ロジャーズはジョン・ウォーレンと『復員兵とのカウンセリング』(1967) を出版した。第二次世界大戦によって多くの戦争神経症の患者がアメリカ国内に発生したことに応じた著作で

あった (泉野, 2005)。

1946年、アメリカ心理学会の会長となった。任期は1年だった。

同年、ロジャーズはシカゴ市で、参加者自身の問題探求・解決能力を信頼する方式のグループ活動を実施した。この活動ものちのベーシック・エンカウンター・グループにつながった (増田, 1998)。

1947年、ロジャーズはミシガン州デトロイト市で開かれたアメリカ心理学会の年次大会に参加し、「パーソナリティの構成に関するいくつかの観察」と題する会長講演をおこなった。これは、彼がカウンセリングの研究と実践から得た知見に基づき、従来の臨床心理学やパーソナリティ理論とは異なる学問体系を心理学の新領域として認知すべきと主張したものだ。講演が終わったあと、会員たちが大勢集まっている控室に入ってゆくと、それまで騒がしかった室内が急に静かになり、だれもが押し黙って、祝辞もほとんどなかった。ロジャーズは自分の講演に対する批判がなされていたと感じた (泉野, 2005)。

1949年、ある女性クライアントを対象に進めていたカウンセリングで、ロジャーズは困難を経験した。ロジャーズによれば、

女性はあたかも適確にボタンを押すように私が一番傷つく所を責めてきたのです。私は全く混乱してしまいました。[中略]心理治療者の所へ行きました。彼は私を幾らか援助してくれました。それで、私はどこかへ逃げたしまわねばならぬと思いました。その時、妻は非常に理解的でした。そこで、2時間後には、荷物をまとめて、シカゴから2カ月間脱け出したのです (畠瀬、見藤, 1985, p.47)。

できごとへの彼の反応が過剰・過敏であったことから、Cohen (1997) は、あるいは彼は当該クライアントと性的な関係をもってしまい、それで逃げだすかたちを取ったのではないかと推理した。ただし、推理を裏づける証拠はない。

1951年、『クライアント中心療法』(2005) を出版した。評判となった反面、心理学専門誌のあつかいは冷淡だった (ソーン, 2003)。だが、ドライデンとミットン (2005) のように、この本をきっかけにロジャーズが心理療法の世界で臨床家・研

究者・理論家として指導的存在になったと考える人は多い。同書によってロジャーズは医師以外でカウンセリング法の体系を築きあげた最初の人物になった(富田、1992)。

ロジャーズが提唱したクライアント中心療法とはどのようなものであるかについて、長井(1997)が簡潔にまとめている。

詳しい病歴もとらないし、心理検査も行わない。精神発達理論も精神病理に関する理論も不要である。カウンセリングの場で何を話題にするかは、クライアントが決める。クライアントは自分が置かれた状況やその中にいる人々や自分の行動・感情やできごとなどについて自由に話し、カウンセラーは常にその中に示されるクライアント自身に反応する。カウンセラーからの質問は最低限に維持される。質問は基本的に発言内容を明確に把握するために行われる。カウンセラーは問題にではなく、ひたすらクライアントに注目し、傾聴する。[中略]カウンセラーは自己の価値判断基準や宗教や倫理観に基づいて判断したり、説明したり、非難したりしてはならない。感情的生命・有機体的生命としての、また感情と感覚を有する身体的生命としてのクライアントに対する注目に専心すること、換言すればクライアントに主導権を与え、主体性と自発性を確保することが、状況を活性化する(p.88)。

保坂と浅井(2004)によれば、ロジャーズには、その後捨て去った(あるいは否定している)非指示的(non-directive)療法の型(おうむ返しや感情の反射)がいつまでもついてまわる(p.224)。

状況があった。本人はこのような状況を喜んでおらず、そこで『クライアント中心療法』では技法を説明せずにカウンセラーの態度に焦点をあてた。何の脅威も感じさせない安全な雰囲気の中でクライアントの主体性や自発性を徹底的に尊重する関係自体がカウンセラーが提供できる最も有効な援助である、としたのだ(諸富、1997)。

クライアント中心という語には、ロジャーズがいただく、

何が傷つき、どの方向に行くべきか、どんな問題が決定的か、どんな経験が深く隠されているかなどを知っているのは、クライアントその人だけである(一瀬、1995、p.146)。信頼が込められている。ロジャーズのこうした信

頼は、以降、多様な個人やグループに対する信頼へと拡大していった(小松、1999)。同時に、ロジャーズの、

責任を有しており、いろいろな決定をするのは、クライアントなのだ(Hayes、2004、p.258)。

という言明も、この語に係っている。

『クライアント中心療法』書では、ロジャーズが考えた人格と行動の理論が19の命題で述べられており、一般に「自己理論」と呼ばれている。ロジャーズ(2005)が述べた内容は、

- 1 個人はすべて、自分を中心とした、絶え間なく変化している体験の世界に存在している。
- 2 生命体は、経験され知覚されるものとしての場に反応する。この認知される場は、個人にとって「現実(reality)」である。
- 3 生命体は一つの有機的な全体(an organized whole)として、この現象的場に反応する。
- 4 生命体は、一つの基本的な傾向と力(striving)をもっている—それは、体験のただ中にある生命体自身を実現し、維持し、増進することである。
- 5 行動とは基本的に、認知された場の中で、生命体が体験されるものとしての欲求を満たすために行う目標追求的な動きである。
- 6 情動とは、そうした目標追求的な行動にともなうものであり、多くの場合、その行動を促進するものである。情動の種類は、行動がなにかを求めているのか、それとも満足しているのかといった側面と関連しており、また情動の強さは、生命体の維持と増進にとって行動がどのような意味をもっているかについての認知と関係している。
- 7 行動を理解するためのもっとも有利な視点は、その個人自身がつま内側からの視点(the internal frame of reference)によるものである。
- 8 全体に認知される場のある部分は、しだいに自己(the self)として分化されるようになる。
- 9 環境との相互作用の結果として、特に他者との評価的な相互作用の結果として、

- 自己の構造が形成される—それは、「私 (“I” or “me”）」の特徴や関係についての知覚の、有機的で流動的な、しかし一貫した概念的パターンであり、そこにはその概念と結びついた価値観も含まれている。
- 10 経験と結びついた価値観や、自己の構造の一部である価値観は、ある場合には生命体によって直接に経験された価値観であり、またある場合には、他者から投入されたか引き継がれた価値観であるが、後者の場合、それはあたかも直接に経験されたかのように歪曲して知覚されている。
- 11 体験が個人の生活の中で生起するとき、それは次のいずれかとなる。(a) 自己とのなんらかの関係の中へと象徴化され、認知され、組織化される、(b) 自己の構造との関係がまったく認知されないため、無視される、(c) その体験が自己の構造と矛盾するため、象徴化が否認されるか、あるいは歪曲した象徴化がなされる。
- 12 生命体が採択する行動様式のほとんどは、自己概念と一致したものである。
- 13 ある場合には、行動は、生命体の象徴化されていない体験や欲求によっても起こりうる。こうした行動は、自己の構造と一致しないが、このような場合には、個人はその行動を「自分のものであると認め」ない。
- 14 心理的不適応とは、生命体が、重要な知覚的・直感的な体験 (significant sensory and visceral experiences) に気づくことを否認し、その結果、そうした体験が象徴化されずに、自己構造のゲシュタルトの中に組織化されないときに生じる。このような状況が存在するとき、基本的または潜在的な心理的緊張が生じる。
- 15 心理的適応とは、自己概念が、ある水準以上の象徴化において、生命体の知覚的・直感的な体験の全体を自己概念と一致した関係の中に取り入れているか、あるいは取り入れることができるときに存在する。
- 16 自己の組織あるいは構造と一致しない体験はすべて、なんらかの脅威として認知される可能性をもつ。そして、このような認知が多ければ多いほど、自己の構造はそれ自体を維持するためにより強固に組織化される。
- 17 自己の構造にとって本来的にまったくどんな脅威もないような一定の条件下では、自己の構造と一致しない体験がしだいに認知され、検討されるようになり、そして自己の構造はこうした体験を取り入れ、包含するように修正されていく。
- 18 個人が自分の知覚的・直感的体験の全体を認知し、それを一貫した統合的なシステムの中へと受け入れるとき、その個人は、必然的に他者をよりいっそう理解し、他者を独立した個人としてよりいっそう受容するようになる。
- 19 個人は、自分の生命体の体験を自己の構造の中へと認知し受容するにつれて、大部分は歪曲して象徴化されていた、他者からの投入に基づく現在の価値観のシステムを、連続する生命体の価値づけのプロセスに置き換えていることに気づく (p.317)。
- 以上であり、前半を、倉島 (2004) は「個人は自分が中心で、主観的に体験した現象に反応する。その私的世界は本人しか知り得ないが、共感的理解で接近できる。また、個人が可能性の実現に向けて成長しようとする欲求がある (p.66)」と整理した。
- 上記命題などによって、ロジャーズは人格心理学と接点をもった (渡辺, 2003)。さらに、現象学にも近づいた。
- ロジャーズはまた、カウンセリングの方法として、科学的心理学とは別系の哲学的理論として省みられなかった現象学を取り上げた。現象学は、患者の病的体験という現象そのものを患者自身の身になってありのままに記述し、了解する方法として、ヨーロッパ大陸の精神病理学で用いられてきた (渡辺, 2003, p.120)。
- キーン (1989) は、とくに行動主義を俎上にのぼせながら、
- 人間的な問題を技術的に解決しようとする B・F・スキナーの努力のような試みは、ヒューマニストの間に底深い不快感を引き起こす。[中略] 現象学的心理学は、経験しつつある存在としての人間の理論をさらに発展さ

せることにより、スキナー流のもろもろの科学技術に対するヒューマニスティックな反応を支える、知的な担い手でありうる (p.222)。心理学の現象学への接近を評価している。

1952年、のちに「フォーカシング」で著名になるユージン・ジェンドリンがシカゴ大学カウンセリング・センターに加わり、ロジャーズとともに活動した。ジェンドリンは、ロジャーズの思い出として、

彼は怒りをあらわにすることなどなかった。自分の気持ちや要求ははっきり述べたが、それを人に押し付けなかった。秘書が友人と電話で話したりしていると、彼女の手が空くまで……忍耐強く待っていた。……彼は人を心から思いやった (台、2011、p.156)。

人柄のよさを書き記した。

いっぽう、同年、ロジャーズはある論文を発表した。「ホーソン研究」というものがあり、これは1930年前後にアメリカでおこなわれた勤労者の職務上の能率や人間関係を調べた研究である。小沢 (2008) は、ホーソン研究が勤労者の怒りを経営者側の方針への適応に転化させ、勤労者を組合活動などに向かわせるのではなく穏やかに働かせるための操作法の探求だったとしたうえで、

ホーソン実験の中心的研究者のひとりであるF・J・レスリスバーガーが、来談者中心療法という名で日本でもよく知られているC・R・ロジャーズとのちに共同論文を書いていることは、あまり知られていない。それは1952年のことで、「コミュニケーションの障壁と通路」という意味のタイトルのもと、経済界の「権威ある」雑誌『ハーバード・ビジネス・レビュー』に掲載されて、その後40年間、ベストセラー論文として産業界に広く読まれ、大きな影響を与えた。「相手に話させ、自分は聴くだけ」というカウンセリング技法の有効性についての論述が、その柱である。ロジャーズは日本で非指示的カウンセリング技法の祖であるかのように受け止められている節があるが、それ以前のホーソン実験に始まる人事管理研究がその論理や技法に影響を及ぼしていることは自明であろう。

[中略]ロジャーズはそれを受け継ぎながら個人の感情管理に焦点を当てて展開したということが出来る。こうして、人びとの不満や怒りを巧みにコントロールする技法は、あらゆる

領域の管理者に歓迎され政治的権力の支援のもとに社会に浸透した (p.12)。

[ロジャーズの共著論文は]再掲載されたが、そこには「両手で口を覆って話を聴く経営者」と「両手で耳を覆って話をする使用者」の揶揄的なマンガが付されている。「黙って相手の話をじっと聴きなさい、そうすれば相手が自分から変わり、労使関係は波風立たずにうまくいきますよ」と、経営者たちに告げているのだ。傾聴という礼儀に基づくはずの営みが、対人操作技法として手段化している。そこには慇懃無礼という言葉こそがふさわしいものだろう (p.96)。

民主的で人間的というイメージが強いロジャーズの暗部のほうに目を向けた。

1954年、ロジャーズ (ロージャズ) はロザリンド・F・ダイヤモンドおよび他の仲間たちとの共著『人格転換の心理』(1961) を出版した。

1955年、ロジャーズは、C I A (アメリカ中央情報局) の接触を受けた。C I Aは、アメリカの諜報員・軍人たちが敵国に捕われたときに洗脳に抵抗できるための、また、ソビエト連邦から送られてきている諜報員たちを洗脳するための、効果的な方法を模索しており、ロジャーズの協力を必要とした。ロジャーズはその依頼に応じた (Cohen、1997)。

1956年、アメリカ心理学会からロジャーズに「特別科学貢献賞」が授与された。ウルフギャング・ケーラーとケネス・スペンスが同時受賞者だった。ロジャーズの受賞理由は「心理療法について検証可能な理論を定式化したこと、また、その方法の価値を示し、かつ、その理論の含意を探求・検証する広範にして体系的なリサーチを行ったこと (チューダー、メリー、2008、p.193)」であった。ロジャーズは自分の仕事の科学性が認められたことを喜び、落涙した (ロジャーズ、2007)。

このときに、ロジャーズ (ロージャズ) は同学会のシンポジウムで、行動主義心理学者のB・F・スキナーと「人間行動の統制に関する二、三の問題点」(1967) というテーマの討論をした。スキナーはオペラント条件づけの研究で知られる学者だった。討論にあたって、ロジャーズもスキナーも「相手の考えをこてんぱんにやっつけよう (コーエン、2008、p.19)」と意気込んでいた。実

際には、討論は、まずスキナーが用意してきたプリントを読みあげ、それに対してロジャーズがやはりプリントを読みあげ、再度スキナーが読んで終了、という形式で、両者が自由に意見を交差させる場面はなかった。おもに語られたことは科学と統制についてであった。スキナーは大意「今後、科学による統制を進めることが人々に益する」と述べた。ロジャーズは大意「科学から統制を受けるのではなく、人間が科学を主体的に選択することのほうが望ましい」と応答した。最後に、スキナーは大意「人々が主体的だと思っていることは、実は統制されたものである」と返した。以上のやりとりになった。

ロジャーズによれば、カール・プリブラムという学者の評価では、討論はロジャーズのほうが優勢だった（ロジャーズ、ラッセル、2006）。

討論は同年11月の『サイエンス』誌に掲載され（山本、1990）、ほどなく出版されて、心理学の世界で最も版を重ねた出版物になった（ロジャーズ、2007）。

同じ年、ロジャーズはアメリカ心理療法家アカデミーという職能団体の初代会長に選ばれた。

1957年、ロジャーズはシカゴ大学から自身の母校であるウィスコンシン大学へ転任し、心理学と精神医学の教授となった。彼はこの大学で心理学と精神医学を融合させたいという希望をいただいていた（ソーン、2003）。しかし、うまくいかず、同僚たちからの反発もあって、結局、心理学部のほうは辞め精神医学研究所だけの勤務になった。同大学には1963年まで在籍した。

同じ年、「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」（2001）という論文を発表した。ロジャーズはこの論文を自身の最高傑作とみなしていた（カーン、2000）。

論文で、カウンセリングをとおしてクライアントに建設的な人格変化を起こすためには、以下の諸条件が必要であり、そして他のいかなる条件も必要としない、旨を論じた。「セラピスト」というのはカウンセラーのことである。

- (1) 2人の人が心理的な接触をもっている。
- (2) 第1の人（クライアント）は、不一致の状態にあり、傷つきやすく、不安な状態にある。
- (3) 第2の人（セラピスト）は、その関係のなかで一致しており、統合している。
- (4) セラピストは、クライアントに対して、無

条件の肯定的配慮を経験している。

- (5) セラピストは、クライアントの内的照合枠を共感的に理解しており、この経験をクライアントに伝えようと努めている。
- (6) セラピストの共感的理解と無条件の肯定的配慮が、最低限クライアントに伝わっている。

上記のうち、(3)は「自己一致」、(4)は「受容」、(5)は「共感」と呼ばれ、以降、ロジャーズ学派の人々の間で「受容、共感、自己一致」はカウンセラーがもつべき「3条件」または「中核条件」として、重く受けとめられるようになった。なお、理辺良（1993）は、3条件を「無条件の受容」「内的理解」「誠実性」と訳し、渡辺（1996）は、共感を理解的態度、自己一致を誠実な態度、と訳している。他にもいくつかの異なる訳がある。

無条件の肯定的配慮はロジャーズがスタンリー・スタンダルという大学院生の論文から影響を受けたもので、一致という考えかたは心理学者のカール・ワйтеカーのアイデアを取り入れたものである（諸富、1997）。ロジャーズの独創ではなかった。

さらに同じ年、ロジャーズは哲学者のマルティン・ブーバーと対談をおこなった。この対談は公刊され、日本では『ブーバー、ロジャーズ 対話』（2007）のタイトルで出版された。

1958年、アメリカ心理療法家アカデミーが主催した「エレン・ウェストの症例」を検討するシンポジウムに参加した。エレン・ウェストは1940年代にドイツのルードウィヒ・ビンスワンガーが担当した33歳の女性患者だった。毒を飲んで自殺した。ロジャーズは当時の資料を読み、治療のしかたに怒りをおぼえて、クライアント中心療法が対応したのであればより良い結果に到達した、と断言した（ロジャーズ、2007）。

同年、アメリカ心理学会大会のイベントとして、ロジャーズは心理学の専門家たちを対象にベーシック・エンカウンター・グループを試行した（ロジャーズ、ラッセル、2006）。

この年から、ロジャーズは、クライアント中心療法を統合失調症の人たちに適用する研究に着手した（ドライデン、ミットン、2005）。これは、50万ドルの予算をつかい、200名以上の研究者が参加した大規模な研究で、「ウィスコンシン・プロジェクト」と呼ばれる。研究は1963年までつづいた。

当該研究の結果、統合失調症者と治療的な関係をもつのは容易ではないことを知り（飯長、1983）、また、クライアント中心療法が統合失調症を有する人々に効果的とはいえないという結論に至った（諸富、1997）。

医学者のジェフリー・マッソンによれば、ロジャーズが「ウィスコンシン・プロジェクト」を進めていた際に、彼は精神科病院側と馴れあいであり、統合失調症の入院患者たちが受けていた虐待ともいえる状況に対して冷たく無関心だった。他の患者たちの屈辱的な状況も知らないふりをしてきた。こうしたことから、マッソンはロジャーズを「慈悲深い専制君主」と弾劾した。

慈悲の心を持った専制君主は、密かにその力を行使するがゆえに、害悪を及ぼす専制君主とまさに同じくらい邪悪な人物とみなされます（ソーン、2003、p.134）。

マッソンの言葉である。

1958（昭和33）年、ロジャーズが日本におよぼしていた影響は、京都大学の氏原によれば、以下のとおりだった。

その頃はロジャーズしかなかった。本も関西にはほとんどなくて、東大がロジャーズの新しい文献を持っていたのを、コピーして、それで輪読会をしたりしていた。だから、実践では感情の明確化ばかりしていた。今でも覚えているが、子どもに知能検査を受けさせたいというお母さんが来たのに、「知能検査を受けさせたいお気持ちですね」などと返していると、だんだんと腹を立てはじめる。「来るところを間違えました」と言うので、「どうやら来るところを間違えたような感じでしょうか」ってな感じでね。ほとんど役に立っていなかったよ（東畑、2009、p.42）。

1959年、ロジャーズは論文「クライアント・センタードの枠組みから発展したセラピー、パーソナリティ、人間関係の理論」（2001）を発表し、クライアント中心療法のカウンセリングにおいてクライアントに生じる変化を全12項目であらわした。これを田畑（2002）はつぎのように整理した。

- ①クライアントは、次第に自由に自分の感情をよく表現するようになる。
- ②その感情は、自分以外のこと（non-self）より、自己（self）に関したものが多くなる。
- ③自分の感情や知覚の対象を次第に分化さ

せ、弁別してくる。経験はより一層正確に象徴化されるようになる。

- ④クライアントが表わす感情は、自分の経験と自己概念との不一致に関係したものが増えてくる。
- ⑤不一致の脅威を意識の中で経験するようになる。
- ⑥過去において意識することを拒否していたり、歪曲して意識していた感情を、意識の上で気づきながら十分に経験するようになる。
- ⑦自己概念は、以前には意識することを拒否してきたり、歪めて意識していた経験を同化し、取り入れるように再構成されるようになる。
- ⑧自己構造の再構成化によって、自己概念は次第に経験と一致するようになり、防衛も減少してくる。
- ⑨クライアントは脅威を感じることなく、治療者（＝カウンセラー）の示す無条件の好意的尊重を次第に経験するようになる。
- ⑩クライアントは無条件の好意的な自己尊重（self-regard）を感じるようになる。
- ⑪クライアントは自分自身を評価の主体として経験するようになる。
- ⑫クライアントは次第に生活体の経験する価値づけの過程にもとづいて反応するようになる。

この中で特に、③、⑥、⑦、⑧、⑩、⑫がカウンセリング過程そのものの中で必要な要素である（p.38）。

1960年12月、アメリカ人文学・科学アカデミーの主催で、ロジャーズはスキナーと第2回目の討論をおこなった。第1回目と同じく互いにあらかじめ準備した文章を読むというやりとりであった。この討論の内容は公表されていない（Kirschenbaum and Hederson、1990）。

1961年、『ロジャーズが語る自己実現の道』（2005）を出版した。本は数年のうちに60万部を突破する売れゆきを示した（諸富、1997）。

また、1958年に検討したエレン・ウェストの症例を論文にまとめ、「症例 エレン・ウェストと孤独」（2001）のタイトルで1961年に発表した。

さらに、論文「十分に機能する人間：よき生き方についての私見」（2001）も書き、クライアント

中心療法が目標とする人間像を、自己の経験に開かれて実存的に生きている「十分に機能する人間」とした。

同年、ロジャーズは、ロロ・メイが編集した書『Existential Psychology』に「二つの背反する傾向」というタイトルの一章を寄稿し、メイ、アブラハム・マズロー、ゴードン・オルポート、などの実存主義心理学者たちの名前をあげ、「私自身も、もしできるならば、このグループの中に入れておきたい」、こう述べて自らを実存主義心理学者と位置づけた（伊東、1995）。

この年の別の論文「自己が真の自己自身であるということ：人間の目標に関するセラピストの考え」（1967）では、ロジャーズ（ロージャズ）は老子の言葉「The way to do is to be」を引用した。言葉は『老子』（2008）第64章末尾の「万物の自然に輔<sup>もと</sup>づき、而<sup>しか</sup>して敢<sup>あ</sup>えて為<sup>な</sup>さず（万物の本来のあり方に任せているのであって、自分から何かをすることはしないのだ）（p.290）」ではないかといわれている。ロジャーズは著書などにおいて『老子』を2度引用した（伊東、1995）。1965年に、伊東（1995）がロジャーズ本人に確認したところ、彼は『老子』を読んだことはなかった。

同じ年（昭和36年）、茨城キリスト教短期大学（現：茨城キリスト教大学）学長であったローガン・J・フォックスの招聘を受け、ロジャーズは妻と連れだつて来日した（保坂、浅井、2004）。招聘には法務省や日本産業訓練協会も協賛していた。東京・大阪・京都など5か所で講演し、ベーシック・エンカウンター・グループをおこない、京都大学では教育学部で1週間の講義も受けもった。ロジャーズはまもなくアメリカ国外で数々のグループ活動を実施しだすが、昭和36年の日本での実施がそのうちの最初のものであった（ロジャーズ、ラッセル、2006）。滞在は約6週間にわたった。ロジャーズは日本女性の美しさと慎みぶかさに惹きつけられた（Cohen、1997）。

アメリカ以外で最も早くロジャーズ学説を評価した国は日本だった（Cohen、1997）。学説は爆発的ともいえる広がりを見せていた（村上、2004）。「燎原の火のように〔中略〕知れわたった（台、2011、p.154）」という表現もある。ロジャーズは、なぜ自分が日本で人気を博しているのか、不思議に思っていた。来日して、

第二次世界大戦で日本人は根幹を揺るがされ、これまでの道では歩めないのなら、自分たちの考えで正しい道を探そうとしているこ

とでした。〔中略〕私や仲間たちの実践活動が、それまで彼らが従っていた基本哲学に代わる一つになるかもしれないと考えられていました（ロジャーズ、ラッセル、2006、p.177）。得心がいった。

1962年、ミネソタ大学主催のシンポジウムで、ロジャーズはスキナーと第3回目の討論をおこなった。ロジャーズはシンポジウムへの招待を受けた際の気持ちを述懐した。

「私から辞退するのはやめよう。怖がって避けたと見られる。スキナーが辞退するのがいい、彼はやらないだろう」と思っていたんです。スキナーが受けたら私も受けることにしました。驚いたことに、彼は受けたんです（ロジャーズ、ラッセル、2006、p.173）。シンポジウムで、ロジャーズとスキナーは、2日間（全9時間）、500人以上の聴衆の前で対峙し、丁々発止の意見交換をした。長時間であったため、話題は「行動」「価値」「文化」「教育」など多岐にわたった。討論の最中、ロジャーズはスキナーに語りかけた。

私は90%は同意しています。あなたが人について語ることをすべての90%にです。あなたが人について外側から語っていてもです。しかし、見逃さないのです。あなたが人を内側から理解しようとしなさいことをです（チューダー、メリー、2008、p.20）。

スキナーはのちにこう述べた。

彼〔ロジャーズ〕とは、人間の尊厳とか、人間の根本的なコントロールの方法について数回議論を戦わせたことがあります。私の意見が他人に迷惑を与えるからといって、特に私は心を悩ますわけではありませんし、彼らの苦痛をなだめるために何か手を打とうとは思いません。私の学問的な仕事は、事実を報告しただけですし、私が効果的な公式だと考えるものを報告したにすぎません（エヴァンズ、1972、p.165）。

ロジャーズは討論に関して、

スキナーは録音の公開、逐語録の公開、出版を嫌がっていました。何年も後に、そのことを書いた論文と手紙を送ったら、公開してもいいと言ってくれました。そして公開されましたが、新鮮さは失われていました（ロジャーズ、ラッセル、2006、p.173）。

以上のように残念がった。

当該討論は、ロジャーズ没後、Kirschenbaum and Henderson (1990) 著の『Carl Rogers: Dialogues』に収録された。同書には、ロジャーズとスキナーの討論だけではなく、ロジャーズと他の各界著名人との対談も収録されている。諸富 (1997) は、ロジャーズの対談相手たちが「ロジャーズを一方的に突き放します。『お前みたいな実践家に何がわかるんだ』。そんなプライドが感じられます (p.330)」、こうした読後感を語った。

1962(昭和37)年の秋、カリフォルニア大学バークレー校の大学院に留学していた村瀬 (2004) は、キャンパスで開催されたロジャーズの講演会に参加した。

先生や友人に、日本ではロジャーズは大層人気があり、尊敬されている、といささか高揚して話すと、「彼はこの国ではマイノリティである。だがどんな人物か、どういう話し方をするか関心があるから聴きには行く」という幾分シニカルで冷ややかな調子の返事が返ってきた。[中略]会場に設定された階段の大教室に聴衆は入りきらず、急遽キャンパス内のツールマンホール (行動主義心理学の泰斗の名を冠して建築された、優に千人は収容可能なホール) へ場所は移された。ところが、ここでも聴衆は溢れ、さらにキャンパスから徒歩5分内余のプロテスタントの教会へと会場は変更された。席を埋め尽くした聴衆はどこかしら醒めていて「さて、何を話すのか、説得力はいかばかりなのか、聴いてみようではないか」というところなしか皮肉な空気が漂っているように感じられた。登場したロジャーズは明晰かつ柔らかな口調で、現在の学説を形成するに至った経緯について、静かに、しかし揺るぎない自信を込めて語り始めた。[中略]聴衆は惹きつけられていき、しわぶき一つたてずに、何時しか聴き入っていた。講演が終わると、堂内には静かな熱気が満ちて、文字通り万雷の拍手がしばし鳴りやまなかった (p.281)。

1962年から翌年にかけて、ロジャーズはカリフォルニア州のスタンフォード大学行動科学高等研究センターの客員研究員を務め、精神分析学者のエリック・エリクソンや科学哲学者のマイケル・ポランニーらと知りあった。ポランニーは、

私はカール・ロジャーズが好きです……彼の怒りっぽいところ……純粋なところ……彼という人が私の喜びです (ロジャーズ、ラッ

セル、2006、p.322)。

あたたかいコメントをのこしている。

同じく1962年、ロジャーズは、マズロー、メイ、そして他の仲間たちと「アメリカ人間性心理学会」を発足させ、第一回大会を開催した。一般に、精神分析学を心理学の第一勢力と呼び、行動主義心理学を第二勢力と呼んで、人間性心理学を第三勢力とする。ただし、マズローは、行動主義の源流である実験心理学が精神分析学よりも古いことから行動主義を第一勢力、精神分析学を第二勢力、とした (村上、2004)。ともかく、アメリカ人間性心理学会は第三勢力の重鎮が集結して精神分析や行動主義へ反旗を翻すための集まりだった。

人間性心理学は、

人間は目的的であり、選択的、前進的、意図的な存在であるとし、人間の能力 (十全な機能) と自己実現傾向など、人間の本性が価値を持っているという信頼に根ざす (土沼、2005、p.41)。

ものである。

アメリカ人間性心理学会では、ロジャーズ、マズロー、メイの3人を、アメリカ合衆国の建国に尽くした人たちになぞらえ、学会の「建国の父たち」と呼んでいる (伊東、1995)。マズローはロジャーズよりも6歳若く、ロジャーズにとってウィスコンシン大学とコロンビア大学の後輩だった。メイはロジャーズより7歳若く、ロジャーズのユニオン神学校の後輩にあたる。ただし、ロジャーズは上記各大学・学校に在学中、彼らと出会ってはいない。

アメリカ人間性心理学会の会員数は、1969年に1200人を数えた (ゴープル、1972)。その後、学会名から「アメリカ」が削除され、2013年現在も存続している。日本では1982 (昭和57) 年に「日本人間性心理学会」が発足した。

1963年、61歳だったときに、ロジャーズはウィスコンシン大学を辞職した。彼は辞職を発表する際に、緊張して教授会で発言できなくなり、録音テープを使って一同に聞いてもらった (村山、田畑、1998)。彼がなぜ辞職したかについては複数の理由が考えられるが、既述「ウィスコンシン・プロジェクト」が不成功に終わったことの問題も無視できない要因である (Cohen、1997)。

ロジャーズはこれ以降、ベーシック・エンカウンター・グループに集中しだしたため、彼自身によるクライエント中心療法の発展は、実質この時

点で停止した（本山、2012）。

頼藤・中川・中尾（1993）は、

ロージャーズは、最初子ども、次に親、神経症からとうとう精神病や囚人と、どんどん心理治療が効きにくい対象に挑戦していったものだから、何度もスランプに陥っている。最後は集団療法へと向かうようになったのも（例によって、その動機は美化ないし合理化されて伝えられているが）、どうやら難物相手では歯が立たなくなってきたのだろう（p.117）。

辛辣な評価をくださった。

1964年、ロジャーズはカリフォルニア州サンディエゴ市のラ・ホイヤ地区にあった「西部行動科学研究所」の客員研究員として勤務した。

同年から、ロジャーズはベーシック・エンカウンター・グループを精力的におこないだした。ベーシック・エンカウンター・グループは、人の心の治療よりも、人が精神的に成長することを企図する働きかけである（伊藤、2002）。ゲシュタルト心理学者のクルト・レヴィンの発想をもとにしている。レヴィンは、1946年、ソーシャル・ワーカーや教育者を対象にした訓練に関与した。ある日、スタッフだけではなく参加者たちも交えて小グループで話しあいをしたところ、活発な討議となった。これをヒントにレヴィンは「Tグループ」を考案した。Tグループという名称は「トレーニング・グループ」の略である。

10名前後が1グループとなり、2名のトレーナーがそこに加わる。何の指針も与えられないので、最初Tグループの参加者達は どうしてよいか分からず黙ってしまう。しかし、積極的な参加者が自己紹介を始めたり、トレーナーが進行役になったりして、メンバー1人1人が、徐々に話し始める。トレーナーは、「今ここで起こっていること」に集中するよう促すと、「うわべだけで話している」「自己中心で他人に関心がない」などの意見が参加者から出てきて、グループ全体に緊張感が生まれてくる。それによって、参加者は徐々に建て前だけで話すことはよくないことに気づく。その時起こった率直な気持ちをぶつけ合ったり、どうして自分はこういう言動をとる傾向にあるのか分析し始める。そしてそれをまた正直に打ち明けることで、グループ全員の理解と、信頼を深めていく（塩

谷、1997、p.151）。

上述の内容であった。このTグループをロジャーズがベーシック・エンカウンター・グループに発展させたのだった。

ベーシック・エンカウンター・グループは、広義の「エンカウンター・グループ」のひとつである。エンカウンター・グループには、ベーシック・エンカウンター・グループのほかに、ジェネラル・エンカウンター・グループ、心理劇、交流分析グループ、自己理解グループ、感受性訓練、人間関係トレーニング、などが包含され、それぞれに歴史や理論的背景が異なる（都留、1987）。ベーシック・エンカウンター・グループの「ベーシック」は、日本語では「非構成的」と表現される場合が多い。

エンカウンター・グループというのは、訳すとしたら「出会いのグループ」とでも言うのでしょうか、ふつうはそのまま英語で言っております。[中略]そこでいちばん大事なことは、さっき言いましたように、ややこしい社会の中ではめているマスクをだんだんと脱いでいくことです。そして自分自身というものを出す。自分を出すだけではなくて、同じように自分をさらけだした他人も理解しようとする。そういう経験の場です（河合、2000、p.71）。

ロジャーズは、ベーシック・エンカウンター・グループに「ファシリテーター」として同席した（倉光、1995）。ファシリテーターは直訳すれば「促進者」という意味になる。ベーシック・エンカウンター・グループを進行させる世話役のような人のことである。

ベーシック・エンカウンター・グループへ傾倒しだしてからは、ロジャーズはほとんど個人カウンセリングに従事しなくなり（Cohen、1997）、また、カウンセリング理論に関する重要な著作もしばらく書かなかった（パートン、2006）。野島（2005）によると、

ロジャーズは、ベーシック・エンカウンターを含めた集中的グループ経験を「20世紀最大の社会的発明」と述べている（p.187）。本人は非常に高く評価し、グループ活動に邁進していったのだった。

この1964年、テキサス州ライス大学のシンポジウムで、ロジャーズはスキナーと第4回目の討論をおこなった。これは、ロジャーズと同じ立場の学者2名ならびにスキナーと同じ立場の学者2名

を含めた、計6名による討論であった。ロジャーズおよび人間性心理学者のシグムンド・コッホは、科学の動向が自分たち寄りになってきており、もはやニュートン力学や決定論や因果律は古くなっている、と主張した (Skinner, 1983)。討論を収載したT・W・ワン編 (1980)『行動主義と現象学：現代心理学の対立する基盤』が日本で出版されている。

さらに同年、ロジャーズはカリフォルニア工科大学の相談役になった。大学で、リチャード・ファインマンなど、多数の高名な科学者たちと接した。ファインマン (2000) は、ロジャーズの思い出を綴った文章ではないが、自分の絵画の趣味に関連したエピソードで、彼の名をだした。

なかなか結論のでない会議—たとえばカール・ロジャーズがキヤルテクにやってきて、この大学に心理学科を作るべきかどうかなどを論じたあの会議みたいな—などでは、僕は出席者の面々をスケッチすることにしていた (p.140)。

キヤルテクはカリフォルニア工科大学の略称である。ロジャーズはこの大学に1967年まで所属した。

やはり1964年、ロジャーズはアメリカ人道主義協会から「今年の代表的な人道主義者」に選出された。

1965年、ロジャーズとグロリアというクライアントとの面談を収めた16ミリのフィルムが市販された。グロリアは当時30歳になる女性で、離婚経験があり、9歳の娘と暮らしていた。彼女は、ロジャーズのほかに、ゲシュタルト療法のフレデリック・パールズ、論理情動療法のアルバート・エリス、とも面談した。この3つの面談はビデオ用に企画されたもので、前年の1964年に撮影されていた。ビデオは、アメリカでは『Three approaches to psychotherapy』というタイトルで売られた。日本でのタイトルは『グロリアと3人のセラピスト』になった。発売は1980(昭和55)年だった。クライアントのグロリアは、

三つの面接を終えて、ロジャーズとの間でいちばん楽で、居心地よく、いままでよりずっと愛すべき、やわらかな、優しい自分を感じて、自由で率直に面接を終えることができたと言った (伊藤、1997、p.25)。

面談後のインタビューで、グロリアは、つぎにもう一度3人のカウンセラーのうちの誰かに会うとしたらパールズを希望する、と答えた。実際には、

彼女は、彼女は癌で死去するまでの15年間、とぎれとぎれではあったが、ロジャーズのベーシック・エンカウンター・グループに参加したり、ロジャーズと文通したりした (チューダー、メリー、2008)。このことについてロジャーズは、

1回30分の面接で、真に人間として出会ったその関係の質から15年間の交流が成長したという事実に私は畏敬の念を覚える。たった30分でも、人生に影響をもたらすことができることを知ることは嬉しい (伊藤、1997、p.25)。

という感慨を語った。

伊東 (1995) の研究によれば、グロリアとの面接において、ロジャーズの発語数は約1880語、グロリアが約4310語だった。これに対し、パールズがおこなった面接では、パールズの発語数が約1540語、グロリアは約2340語、エリスの面接では、エリスの発語数は約2570語、グロリアは約1170語、であった。ロジャーズには、カウンセリング中クライアントに多く語らせて自身はあまり語らない印象が定着しているが、語数ではロジャーズのほうがパールズよりも多かった。関連する情報として、丸田 (2004) が、

研修生が実際にロジャーズのカウンセリングに陪席したところ「非指示」どころか、ロジャーズ先生、クライアントに向かって話すこと話すこと、びっくり仰天したという話を聞いた (p.184)。

以上の報告をしている。

田畑 (1995) の情報では、『グロリアと3人のセラピスト』を題材に、

中国系の大学生とヒスパニック系の大学生 (いずれも男女こみの200名あまり) に視聴させ、両群に実施した質問紙の結果を比較した。そして、中国系の学生は、ロジャーズ (Rogers, C.R.) の来談者中心療法によるアプローチよりも、パールズ (Perls, F.) のゲシュタルト療法やエリス (Ellis, A.) の論理情動療法によるアプローチを好むという結果を導き出している (p.27)。

こうした研究もあった。人が心理療法を選択する際に文化の違いが現われることがわかる。

『グロリアと3人のセラピスト』のビデオのなかで、グロリアはロジャーズに対し、「先生が低い声でやさしく話していただきますので、少し落ち着いてきました」と発言している (チューダー、メリー、2008)。ロジャーズのもとで学んだ田畑

(2003)によると、ロジャーズの声は「丸っこい、鼻に抜けるような声 (p.276)」であったらしい。

この年を境に、ロジャーズは酒量が増えだし、家族や知人たちから「人がいうことに耳を貸さない」と難じられるようになった (Cohen, 1997)。

1966 (昭和41) 年、日本では、世界に先がけてロジャーズの著書・論文をまとめた『ロージャズ全集』の出版が始まった。出版したのは岩崎学術出版社で、同全集は全23巻になった。全集には、『クライアント中心療法』が異なる巻に分断されて掲載されたり、重要箇所にも誤訳があるなどの、いくつかの問題点があった (保坂、浅井、2004)。

1967年。

ロジャーズはかねてより「ベーシック・エンカウンター・グループと学習者を中心とした教育を融合させれば大きな成果につながるのではないか」と考えていた。カリフォルニア州ロサンゼルス市のイマキュレート・ハート学区がこの考えに賛同したので、同年から、試験的な活動を実施しだした。しかし、当初は成果があがったものの、しだいに反対者が増加した。

[ロジャーズの] 仲間たちが、「あれは失敗だ」などと言っていたんです。確かに、それをしたお蔭で参加した人と非参加者のズレが起きてしまって、上層部が怒ってしまって教員全部解雇してしまったんです。エンカウンター・グループ体験と現実社会のある種のズレが多分起こったのだと思いますが、そこでそのシステムがかなりメチャメチャになってしまった。もともと教育改革で、エンカウンターでうまくいくはずだったのが、教師を辞めさせるということになって混乱してしまい、失敗だと言われているんです (村山、田畑、1998、p.7)。

ついにロジャーズの理論とは無関係な他の方法が取りいれられるという結果に終わった (飯長、1983)。ロジャーズ自身は失敗を認めていなかった (村山、田畑、1998)。

1968年、ロジャーズはサンディエゴ市ラ・ホイヤに「人間研究センター」を設立した。ベーシック・エンカウンター・グループが有名になりすぎ西部行動科学研究所において他部門の不興を買ったため、ロジャーズが約25名のスタッフとともに分離して興したものだ (飯長、1983)。ロ

ジャーズが外部から獲得した研究費の約80%が西部行動科学研究所の運営費に使われていたのが不服で独立の決意をした、という事情もあった (畠瀬、2012)。ロジャーズの同僚だったビル・クールソンが「自分たちは新しい組織を作るべきだ」と主張したのが発端だった (ロジャーズ、2007)。日を追って多様な学問領域から40名以上のメンバーが集まった (ソーン、2003)。ロジャーズは同センターの客員教授を務め、死去するまでの20年近く働いた。

増田 (1998) は、人間研究センターについて、つぎのように紹介した。

ここでは、その組織の代表者をおいてはいるが、その代表者によって管理されるということは、一切排除されている。それは、「非組織的な組織」であり、ひとつのコミュニティである、と言える。例えば、常勤的スタッフ (秘書?) 以外はここからの給与はなく、それぞれの研究やプロジェクトで得た資金から応分の収入を得る、という形態をとってすすめられる (p.68)。

ロジャーズ (2007) も、

最も馬鹿げた、不可能な、常識的でない、組織らしくない組織である (p.65)。

愛着を込めながら説明している。

同センターは、

部屋が4つくらいしかない。5DKくらいのアパートと考えたらいい。そんな程度のもので、とても日本流には、研究所などという名前を付けられるようなところではない。はっきり言うと研究員の集会所 (村山、田畑、1998、p.26)。

といった簡素な造りだった。

開所当時は、毎年夏期3回17日間のプログラムが開講され、参加者数は1回100名の定員がほぼ埋まる盛況ぶりだった。2012年現在は、毎夏1回6日間のプログラムになっている (本山、2012)。

1960年代の後半から、アメリカでは、カリフォルニア州を中心に「ヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント (人間の潜在力の開発運動)」が起こった。1970年代に広がっていった。運動は人間性心理学を背景にしたものであるため「ポップ心理学」とも呼ばれる。このヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメントの基盤となったのがロジャーズのクライアント中心療法だった (吉福、1989)。

1969年、ロジャーズ (2006) は『学習する自由：教育はどうなるのか』を公刊した。小学校教師をしていた姪のルス・コーネルに「私たちが読めるような教育の本を書いていないのはなぜか」と質問されたことが執筆の動機だった (ロジャーズ、2007)。学者たちからは「表面的すぎる」「自分に都合が良いことをやっているだけ」などの批判をされたが、一般の人々には受け入れられた (飯長、1983)。本は30万部以上売れるベストセラーになった (ソーン、2003)。

同年、ロジャーズが出演したベーシック・エンカウンター・グループの記録映画『Journey into Self』が、第41回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した。これは8人が登場する映画で、8人に加えてロジャーズとリチャード・ファースンも登場する。ふたりはファシリテーターである。グループは2日間16時間にわたっておこなわれ、映画ではそれが47分間に編集された。ロジャーズは温和な雰囲気に参加者たちの発言を聞いている (岩村、1998)。

第41回アカデミー賞は1968年に公開された映画に贈られた。長編ドキュメンタリー映画賞は、当初の4月、『ヤング・アメリカンズ：歌え青春！』が受賞した。ところが、この映画が1967年に公開されていた事実が判明し、取り消しとなった。そして、5月に『Journey into Self』が受賞したのだった。

ちなみに、第41回のアカデミー賞作品賞は『オリバー！』、撮影賞は『ロミオとジュリエット』、視覚効果賞は『2001年 宇宙の旅』だった。『Journey into Self』は、日本では『出会いへの道：あるエンカウンター・グループの記録』というタイトルになった。

映画に登場するファースンも心理学者で、ロジャーズの教え子だった。師ロジャーズに親炙し、師を「静かなる革命家」と呼んだ。ロジャーズはそう呼ばれることを好んでいた (諸富、1997)。

1970年、ロジャーズは『エンカウンター・グループ：人間信頼の原点を求めて』(1982) を発表した。原著は5年間で約24万冊売れた。

彼の飲酒量はいつそう増えていた。眼病を患い、高血圧の悩みももっていた (Cohen、1997)。

1972年、ロジャーズはアメリカ心理学会の「特別職業貢献賞」を受賞した。

この年、彼は『結婚革命：パートナーになること』(1982) を出版した。本のなかに、自身の娘ナタリーとその離婚した夫の事例を本人たちの同意を得ずにくわしく書き込み、元夫から激しい抗議を受けた。ロジャーズは抗議を無視した (Cohen、1997)。同書は、ある部分で白人と黒人の結婚を論じていたため、人種差別政策を施行中の南アフリカ共和国では発売禁止になった (諸富、1997)。

同年 (昭和47年) から約1年半、村山が人間研究センターに留学し、ロジャーズと接した。

よくパーティがあるんですが、向こうでは食べ物よりも話が主ですから、私は英語で喋るのは得意でないから困ってしまう。そうすると、いつの間にかロジャーズが隣にいる、孤独な感じに見えるのでしょうか。そういう時にいつの間にか、気がつくそばにいてくれました (村山、田畑、1998、p.8)。

一般的に、ロジャーズには、やさしい人、おだやかな人、というイメージができています。たとえば、ある女性心理学者のつぎのような記述がある。

夫は私を見つめた。[中略]夫は心理学者ではないけれども、もし心理学者だったとしたら、カール・ロジャーズ派に属していただろう。柔らかい声と、もっと柔らかい物腰を持った人間だ (スレイター、2005、p.36)。

けれども、ロジャーズはやわらかいだけではなかった。

ロジャーズ自身が、通常予想されるような、柔和なだけの人ではなく、自分を積極的に押し出し、自分自身を生ききるタイプの人間である (飯長、1983、p.13)。

断固たる面ももちあわせていた。

本人は、

僕は、穏やかでおとなしい人間に見られてしまっているんだよ。だから、一杯ぶつかって豪腕ぶりを発揮すると、みんな驚いてしまってね。何しろ僕は、開拓者精神で育てられているからね [中略] ガラガラ蛇に気をつけろ！ それから、僕を踏みつけにする人を許さない！ (畠瀬、2006、p.329)。

このように自己を語っている。

彼の人柄を物語る別のエピソードもある。学問的立場は行動療法に近いウィリアム・ファーカーは、ロジャーズに敬意をもっていた。

学者の集まりで議論が白熱したときロジャーズが、では私が実際にカウンセリング

をしてみるからそれを見てほしい、と言って参集者の前でしてみせたというのである。ファーカーに言わせれば、同業者の前でカウンセリングをしてみせるというのは、なかなか勇気のいることだと言うのである。ロジャーズの素直さにファーカーは感服したという（國分、1979、p.181）。

1972年はロジャーズの長兄レスターが他界した年でもあった。

1973年、カナダのモントリオールで開かれたアメリカ心理学会の大会で、ロジャーズは「46年を回顧して」（1984）という講演をおこなった。講演で、自分自身の精神医学との闘い、行動主義心理学との闘い、などについて述べた。

同じ年、息子デイビッドと息子の妻コーキーのあいだの不和に対し、ロジャーズは息子側に立って種々の画策をした。デイビッドは離婚を申請し、コーキーは自殺した（Cohen、1997）。

その年、ロジャーズは、プロテスタントとカトリックのあいだの紛争が深刻だった北アイルランドの首府ベルファスト市で、5人のプロテスタント信者および4人のカトリック信者からなるベーシック・エンカウンター・グループを挙行した。これは「ベルファスト・ワークショップ」と呼ばれる。グループでは全16時間の活動をとおして両信者間の憎悪・不信が表明された。互いが十分に理解しあう結果には至らなかった（飯長、1983）が、参加者たちはグループが終了した以降も自発的に集まりつづけた（村山、1998）。詳細は、パトリック・ライス（2003）『鋼鉄のシャッター：北アイルランド紛争とエンカウンター・グループ』に記されている。なお、ワークショップという言葉は「ベーシック・エンカウンター・グループを体験する場」を意味している。

さらに同年、ロジャーズ（2007）は小論文「援助的職業への新しい挑戦」を発表し、論文内でカルロス・カスタネイダを称揚した。現在、カスタネイダに対しては「インチキ文化人類学者（ガードナー、2004、p.215）」的な評価が大勢になっている。このころからロジャーズは臨死体験などに関心をもちはじめた（諸富、1997）。

1974年、ロジャーズは精神的にやや不調になったものの、いつしか回復した（飯長、1983）。

アメリカで6回、イギリスで1回、計7回、毎回16日間のベーシック・エンカウンター・グルー

プをおこなった。各回の参加者は65名から136名だった（無藤、1983）。

1975年ごろから、ロジャーズは自身が導くベーシック・エンカウンター・グループを「パーソン・センタード・アプローチ」または「パーソン・センタード・グループ・アプローチ」と呼ぶようになった。国際的には「パーソン・センタード・セラピー」の名称のほうが多く用いられている（末武、2011）。イギリスにおいてはそれが顕著で、パーソン・センタード・アプローチの語は使用されない（廣瀬、2007）。

この年、ロジャーズは、グループ活動に関わっていた際に、若い女性（バニース・トードレス）と知りあい、浮気をしだした（Cohen、1997）。

1977年、ロジャーズは人間研究センターのスタッフたち全5名でブラジルへ赴き、「シクロ」と呼ばれる大規模なベーシック・エンカウンター・グループを開催した。開催地はレシフェ市、サンパウロ市、リオデジャネイロ市の3都市で、毎回500名から800名の参加者があった。4分の3が女性だった。参加者は十重から十五重になり、イスや床に座ってロジャーズたちを囲んだ（ロジャーズ、2007）。

1978年、中東の和平をめぐり、政治の世界で以下のできごとがあった。

米国のカーター大統領がイスラエルのベギン首相とエジプトのサダト大統領をキャンプ・デイビッドに招いて、数日間、文字どおりかみしもを脱いだつきあいの合宿をしたのです。そのときに、水入らずの会談を集中的におこなうとともに、くつろいだつきあいの時を過ごすことによって両国間の対立に雪解けが起こり、和解への道が開かれました。ロジャーズは、このいきさつを、現実社会で起こったエンカウンターの良い例であり、彼の主張する人間尊重の精神（パーソン・センタード・アプローチ-PCA）が見事に具現しているとして、いくつかの論文に書き上げています（都留、1987、p.205）。

この1978（昭和53）年、見藤（2003）が渡米して人間研究センターを訪ね、滞在した。滞在中、ロジャーズ宅の催しに招かれた。

家はサンディエゴ湾を望む高台にあって、玄関を入ると日本人が贈ったであろう品々が

あちこちに飾られていた。[中略]ロジャース婦人は車椅子で、御病気のため痛々しい程瘦せておられたが、皆の間を挨拶して廻られ程なく退席された。奥様の御病気でカールはさぞ大変であろうと思われるのに、カールも自分で作ったグラタン風のものを出されたのである。カールが料理をする図など、日本にいる時には想像だにしなかった (p.279)。

当年、ロジャーズは妻とともに不思議な経験をした。

ヘレンの死の1年前から、ロジャース夫妻は死生観について大きく考えを変える体験を重ねていた。ロジャース夫妻はお金をとらないある霊媒師を訪ね、ヘレンが霊媒と接するのを観察し、ロジャースは「信じられない、それでいて不正のない経験を私はただ見つめるしかありませんでした」と書いている (村山、1998、p.83)。

1979年、妻のヘレンが死去した。

ヘレンの死をきっかけにロジャーズはみえない世界への興味を深めて霊的現象に没頭するようになり (ソーン、2003)、「スピリチュアリティ」「輪廻転生」「宇宙意識」などへの関心が増していった (チューダー、メリー、2008)。

ソーン (2000) は、この時期のロジャーズが、人間同士の関係はなにかに超越的なものの一部である、深遠な成長・癒し・エネルギーが存在する、と主張したことに関して、

驚くべき主張を前に、多くのパーソンセンタードの臨床家は当惑し、また場合によっては拒絶さえしました。この乱暴で大げさな主張はロジャーズの才能の衰えによるものなのか、時として死に近づいた偉大な人間を苦しめる「誇大妄想」のせいであると、表だってあるいは私的な場で明言する人々が確かにいました (p.71)。

ソーン自身はロジャーズの主張を支持している。

ロジャーズは毎日ひと瓶のウォッカを飲んでおり、すこし太って、歩行時によろけたりするようになった (Cohen、1997)。

彼とパニース・トードレスとの男女関係は1979年に終了したが、以後も彼は複数の女性と親密な交際をした (Cohen、1997)。

1980年、ロジャーズは視力が弱まった反面、体型はほっそりしたものに戻った (Cohen、1997)。

1981年、ロジャーズがロロ・メイへの批判的コメントを学術誌に載せたことが引き金になり、彼とメイとのあいだで、公開書簡による反批判・再批判の応酬があった (諸富、1997)。

1982年、ロジャーズは80歳の誕生日に自分の余生を国際平和のためにささげようと決心し、そのことを宣言した (村山、1993)。爾来、「カール・ロジャーズ平和プロジェクト」を結成して活動した。

同年、ロジャーズは人種差別政策で国際的な非難を受けていた南アフリカ共和国へ出向き、ヨハネスバーグ市において白人と黒人の男女を集めたベーシック・エンカウンター・グループを実施した。

さらに同年、ロジャーズは、アメリカ心理学会の臨床心理学とカウンセリングの領域におけるアンケート調査で「最も影響力がある10人の心理療法家」のうちの第1位に選ばれた (Kirschenbaum and Henderson、1989)。

1983 (昭和58) 年の春、ロジャーズは、娘のナタリーを伴って、3度目の来日をした。滞在は2週間だった。彼は「日本へ来たのは学生時代で (大正時代である)、人力車に乗せられ、動物でなく人間に引っぱってもらうのを申しわけなく思った (島瀬、2007、p.308)」、このように語り人々を笑わせた。招聘者たちから日本での希望を聞かれると、旅館に宿泊したい、瀬戸内海で舟に乗りたい、ふたつの回答をし、どちらも実現した (島瀬、2006)。滞在中、日本人研究者からの「精神分析は非科学的だ」という考えは今も有しているか」という質問に「自分の知る限り、まだ実証的なりサーチへの道にはほど遠い (島瀬、2004、p.236)」と答えた。

また、

彼 [ロジャーズ] はクライアントと面接するとき、じっとその眼を見つめています。来日したときのデモンストレーションで、それを見た参加者のひとりから、その眼光の鋭さが指摘されると、「私は、クライアントの眼をとおして、口から出ることばにはならないが、その人のこころのなかで動いていることをよく知りたいと思うから、一生懸命眼を見ているのです」という意味の答えをしています (都留、1987、p.99)。

以上のような一幕もあった。

1985年、ロジャーズは、オーストリアのブルゲンラント州ルストに、中央アメリカを中心とする17カ国の政府高官（元大統領・現副大統領・外務省関係者・議員など）50名を私人として招き、ベーシック・エンカウンター・グループをおこなった。出席者たちは中央アメリカ情勢について意見や感情を自由に表出しあった。これは「ルスト・ワークショップ」と呼ばれている。

ロジャーズの社会問題や国際紛争を対象にした多数の取り組みを概観し、山本（2001）は、（1）北アイルランド和平は成功、（2）中央アメリカ和平は成功、（3）南アフリカ共和国の人種問題の解決は成功、（4）アメリカ合衆国の健康保険制度の改善は失敗、と総括した。このうち、健康保険制度の改善とは、スラム街のアフリカ系アメリカ人や中南米系アメリカ人たち健康保険の受給者側と健康保険の提供者側の双方を対象に試みたグループ活動のことで、熱のこもった対決・対話が発生した（ロジャーズ、1982）。

1986年、アリゾナ州フェニックスで開催された「心理療法の発展会議」に招待され、講演をした。全米からの参加者たちが7000人を超えていた。演壇に立ったロジャーズに参加者たちは起立して拍手した。拍手は5分間鳴りやまなかった（泉野、2005）。

1987年、ロジャーズ（2001）はエッセイ「85歳を迎えて」を書き、1970年から1986年までのあいだにパーソン・センタード・グループ・アプローチをテーマにした論文が165本発表され、その全部が日本においてであったこと、また、ブラジルで自分の理論をあつかった大規模な会議がひらかれたこと、などを紹介した。

ロジャーズは、生涯で、共著も含めると16冊の著書を執筆し、200本を超える論文を書いた。アメリカ心理学会、アメリカ応用心理学会、アメリカ心理療法家アカデミー、の3つの学会・団体の会長を務めた。

晩年に至っても多忙であったが、本人は「靴を履いたまま死にたい（野島、2007、p.121）」と語っていた。

少年時代からの植物への興味は老後までつき、自宅庭園での植物栽培が趣味だった。また、写真や自動車づくりなどの楽しみも有していた

（ドライデン、ミットン、2005）。毎日約3キロの散歩をしていた（中川、大須賀、1985）。

この年の1月末に、ロジャーズはラ・ホイヤの自宅で転倒して腰骨を損傷し、手術を受けた。手術は成功した。しかし、心臓発作が起こり、意識不明に陥った。全米から駆けつけた教え子たちが見守るなか、彼は、1987年2月4日、カリフォルニア州サンディエゴ市で死去した。85歳だった。遺言によって墓は設けず、遺骨はラ・ホイヤの海に散骨された（畠瀬、2006）。

ドライデンとミットン（2005）によれば、

ロジャーズは、本人の知らないうちに、1987年のノーベル平和賞候補になっていたが、最終決定の前に逝去した（p.106）。

候補となったのはおそらく事実であろう。ただ、疑問がのこる。なぜならば、同平和賞は「どういふ人物が、誰によって推薦されたのかは50年間にわたって秘密に付される（浜田、2009、p.16）」ものだからである。1987年にノーベル平和賞を受賞したのは、コスタリカ大統領のオスカル・アリアス・サンチェスだった。

ロジャーズの最後の所属先となった人間研究センターは、彼の没後、「カール・ロジャーズ記念図書館」を開館した（Sharf、2000）。

## おわりに

文献を参考にしながらカール・ロジャーズの一生を追跡した。追跡してゆくなかで、（1）精神分析学や行動主義心理学に異議を唱え心理学の改革に着手したロジャーズにとって、大学卒業論文のテーマに選んだ宗教改革者マルティン・ルターは生涯にわたるロール・モデル（模範像）であったのではないか、（2）必要十分条件の語に代表されるようにロジャーズの著書・論文には数学的な表現・話しの進めかたが頻出するが、これは彼が数学に関心をもっていたからではないか、または数学を専門的に学んだことがあるのではないか、（3）ロジャーズは晩年ノーベル平和賞受賞を意識しつつベーシック・エンカウンター・グループの実践活動をしたのではないか、などの仮説が生じた。しかし、仮説の当否を確認することは困難である。

引用文献・和書 (50音順)

- ・飯塚銀次 (1977)、「来談者中心療法解説」(収録：飯塚銀次、関口和夫『カウンセリング代表事例選』)、学苑社。
- ・飯長喜一郎 (1983)、「ロジャーズの生涯と思想」(収録：佐治守夫・飯長喜一郎『ロジャーズクライアント中心療法』)、有斐閣新書。
- ・飯長喜一郎 (2011)、「ロジャーズの生涯と思想」(収録：佐治守夫・飯長喜一郎『新版 ロジャーズ クライアント中心療法：カウンセリングの核心を学ぶ』)、有斐閣。
- ・生田倫子 (2012)、「先人に訊ねる日本の心理臨床学史：岡堂哲雄先生に訊く」(収録：日本心理臨床学会『心理臨床の広場』、Vol.4, No.2)。
- ・池見陽 (1995)、『心のメッセージを聴く：実感が語る心理学』、講談社現代新書。
- ・石口彰 (2008)、「コラム：エンカウンター・グループ」(収録：石口彰『臨床心理学用語事典』)、オーム社。
- ・泉野淳子 (2005)、「C・R・ロジャーズにみる臨床心理学と精神医学の相克」(収録：下山晴彦『心理学の新しいかたち・2：心理学史の新しいかたち』)、誠信書房。
- ・磯村健太郎 (2007)、『「スピリチュアル」はなぜ流行るのか』、PHP新書。
- ・一瀬正央 (1995)、「クライアント中心療法」(収録：大塚義孝『こころの科学増刊：臨床心理士入門・改訂版』)、日本評論社。
- ・伊東博 (1995)、『カウンセリング 第四版』、誠信書房。
- ・伊藤義美 (1997)、「ロジャーズとクライアントたち：ハーバート・ブライアン、グロリア、キャシー、ジャン」(収録：『こころの科学』74)、日本評論社。
- ・伊藤義美 (2002)、「ベーシック・エンカウンター・グループ」(収録：上里一郎『心理学基礎事典』)、至文堂。
- ・岩村聡 (1998)、「出会いへの道：あるエンカウンター・グループの記録」(収録：田畑治『現代のエスプリ 374：クライアント中心療法』)、至文堂。
- ・氏原寛 (2009)、『日本の心理臨床・1：カウンセリング実践史』、誠信書房。
- ・氏原寛 (2012)、『心とは何か：カウンセリングと他ならぬ自分』、創元社。
- ・台利夫 (2011)、『心理療法にみる人間観：フロイト、モレノ、ロジャーズに学ぶ』、誠信書房。
- ・江川政成 (1985)、『職場で役立つカウンセリング：PART I 悩みの治療カウンセリング』、千曲秀版社。
- ・塩谷智美 (1997)、『マインド・レイブ：自己啓発セミナーの危険な素顔』、三一書房。
- ・大山正 (1974)、「学習：経験のはたらき」(収録：大山正、詫摩武俊、中島力『心理学』)、有斐閣双書。
- ・岡村達也 (1997)、「クライアント中心療法と精神分析：『ロジャーズとコフォート』試論」(収録：こころの科学・74：村瀬孝雄『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・岡本直子 (1999)、「ベーシック・エンカウンター・グループ」(収録：氏原寛、小川捷之、近藤邦夫、鑪幹八郎、東山紘久、村山正治、山中康裕『カウンセリング辞典』)、ミネルヴァ書房。
- ・小沢牧子 (2000)、『心理学は子どもの味方か？：教育の解放へ』、古今社。
- ・小沢牧子 (2008)、『「心の時代」と教育』、青土社。
- ・小野修 (1966)、「訳者あとがき」(収録：カール・ロージャズ [小野修訳]『ロージャズ全集・第1巻：問題児の治療』)、岩崎学術出版社。
- ・苅谷剛彦、濱名陽子、木村涼子、酒井朗 (2000)、『教育の社会学：「常識」の問い方、見直し方』、有斐閣アルマ。
- ・河合隼雄 (2000)、『河合隼雄のカウンセリング講座』、創元社。
- ・川畑直人 (2006)、「非行」(収録：伊藤美奈子『朝倉心理学講座・16：思春期・青年期 臨床心理学』)、朝倉書店。
- ・木村駿 (1997)、「認知行動心理学の立場から」(収録：高橋史朗『癒しの教育相談理論：ホリスティックな臨床教育学』)、明治図書。
- ・久野能弘 (1990)、「学習理論からみた家族」(収録：石川元『現代のエスプリ 272：家族療法と行動療法』)、至文堂。
- ・久能徹 (1997)、「プロローグ：ロジャーズの一生とその時代」(収録：久能徹、末武康弘、保坂亨、諸富祥彦『ロジャーズを読む』)、岩崎学術出版社。
- ・久能徹 (2004)、「ロジャーズにおける宗教性」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・倉島徹 (2004)、「パーソナリティとは何か」(収録：近藤卓『パーソナリティと心理学：コミュニケーションを深めるために』)、大修館書店。

- ・倉光修 (1995)、『現代心理学入門・5 臨床心理学』、岩波書店。
- ・呉智英、宮崎哲弥 (1999)、『放談の王道』、時事通信社。
- ・桑原知子 (2007)、「臨床心理学とは何か：概観と展望」(収録：桑原知子『朝倉心理学講座・9：臨床心理学』)、朝倉書店。
- ・國分康孝 (1979)、『カウンセリングの技法』、誠信書房。
- ・國分康孝 (1980)、『カウンセリングの理論』、誠信書房。
- ・國分康孝 (1989)、『人を育てる カウンセリング・マインド』、生産性出版。
- ・國分康孝 (1998)、『カウンセリング心理学入門』、PHP新書。
- ・小浜逸郎 (2002)、「東大卒の父親はなぜ息子の『奴隷』になったか」(収録：別冊宝島編集部『「子育て」崩壊!』)、宝島社文庫。
- ・小松正明 (1999)、「ロジャーズ」(収録：氏原寛、小川捷之、近藤邦夫、鑪幹八郎、東山紘久、村山正治、山中康裕『カウンセリング辞典』)、ミネルヴァ書房。
- ・小谷野敦 (2010)、『日本文化論のインチキ』、幻冬舎新書。
- ・近藤卓 (1998)、『生活カウンセリング入門：愛といやしのコミュニケーション』、大修館書店。
- ・佐治守夫 (1987)、「心理療法の今日的課題を問う：C・R・ロジャースが遺したもののからの出発」(収録：近藤邦夫、保坂亨、無藤清子、鈴木乙史、内田純平 (2007)『臨床家 佐治守夫の仕事・3：臨床家としての自分をつくること』)、明石書店。
- ・佐治守夫 (1988)、「カール・ロジャーズの思い出：日本のカウンセリング界に及ぼした影響」(収録：近藤邦夫、保坂亨、無藤清子、鈴木乙史、内田純平 (2007)『臨床家 佐治守夫の仕事・3：臨床家としての自分をつくること』)、明石書店。
- ・佐治守夫 (2006)、『カウンセラーの「こころ」』、みすず書房。
- ・沢崎達夫 (2005)、「傾聴と受容」(収録：岡堂哲雄『現代のエスプリ 別冊：臨床心理学入門事典』)、至文堂。
- ・篠原あづさ (1993)、『私がわからない』、太田出版。
- ・島藺進 (2012)、『現代宗教とスピリチュアリティ』、弘文堂。
- ・白石大介、立木茂雄 (1991)、『カウンセリングの成功と失敗：失敗事例から学ぶ』、創元社。
- ・末武康弘 (1997)、「クライアント中心療法の展望：ロジャーズ以前と以後の問題を中心に」(収録：久能徹、末武康弘、保坂亨、諸富祥彦『ロジャーズを読む』)、岩崎学術出版社。
- ・末武康弘 (2004)、「クライアント中心療法はいま：ロジャーズ学派の最前線を読む」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・末武康弘 (2005)、「訳者あとがき」(収録：C・R・ロジャーズ『カウンセリングと心理療法：実践のための新しい概念』)、岩崎学術出版社。
- ・末武康弘 (2011)、「共感的理解」(収録：松原達哉『カウンセリング実践ハンドブック』)、丸善。
- ・末武康弘 (2011)、「来談者中心カウンセリング」(収録：松原達哉『カウンセリング実践ハンドブック』)、丸善。
- ・菅野泰蔵 (2006)、『カウンセリング方法序説』、日本評論社。
- ・菅村玄二 (2004)、「構成主義からみたクライアント中心療法：構成主義四学派との比較を通して」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・園田雅代 (2003)、「クライアント中心療法」(収録：下山晴彦『よくわかる臨床心理学』)、ミネルヴァ書房。
- ・高砂美樹 (2003)、「20世紀の3大潮流とその批判：心理学の理論的展開」(収録：サトウタツヤ、高砂美樹『流れを読む心理学史：世界と日本の心理学』)、有斐閣アルマ。
- ・高塚雄介 (1999)、「自己理解と他者理解」(収録：佐藤誠、高塚雄介、福山清蔵『電話相談の実際』)、双文社。
- ・高橋龍太郎 (1998)、『わたしの心は壊れてますか?』、扶桑社。
- ・高山文彦 (1998)、『「少年A」14歳の肖像』、新潮文庫。
- ・田畑治 (1995)、「臨床心理的研究」(収録：大塚義孝『こころの科学増刊：臨床心理士入門 改訂版』)、日本評論社。
- ・田畑治 (2002)「クライアント中心のカウンセリング」(収録：岡堂哲雄『現代のエスプリ 別冊：心理カウンセリング P C Aハンドブック』)、至文堂。
- ・田畑治 (2003)、「ロジャースから学んできたこ

- と」(収録：村山正治『現代のエスプリ 別冊：ロジャース学派の現在』)、至文堂。
- ・土沼雅子 (2005)、「人間性心理学と臨床」(収録：岡堂哲雄『現代のエスプリ 別冊：臨床心理学入門事典』)、至文堂。
  - ・都留春夫 (1985)、「カールのまなざし」(収録：畠瀬直子、畠瀬稔、村山正治『カール・ロジャーズとともに：カール&ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップ』)、創元社。
  - ・都留春夫 (1987)、『『出会い』の心理学』、講談社現代新書。
  - ・富田和代 (1992)、「ロジャーズ」(収録：氏原寛、小川捷之、東山紘久、村瀬孝雄、山中康裕『心理臨床大事典』)、培風館。
  - ・豊田正義 (2000)、『壊れかけていた私から壊れそうなあなたへ』、大修館書店。
  - ・鳥越俊太郎、後藤和夫 (2000)、『うちのお父さんは優しい：検証・金属バット事件』、明窓出版。
  - ・長井進 (1997)、『カウンセリング概論』、ナカニシヤ出版。
  - ・中川紀子、大須賀発蔵 (1985)、『『古い』を生きる』(収録：畠瀬直子、畠瀬稔、村山正治『カール・ロジャーズとともに：カール&ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップ』)、創元社。
  - ・中島浩籌 (2010)、『心を遠隔管理する社会：カウンセリング・教育におけるコントロール技法』、現代書館。
  - ・中村希明 (1991)、『心理学おもしろ入門：科学としての心理学の世界』、講談社ブルーバックス。
  - ・夏樹静子 (1997)、『椅子がこわい：私の腰痛放浪記』、文藝春秋。
  - ・西川泰夫 (1975)、『心とは何か：環境と人間』、講談社現代新書。
  - ・野島一彦 (2005)、「ベーシック・エンカウンター」(収録：岡堂哲雄『現代のエスプリ 別冊：臨床心理学入門事典』)、至文堂。
  - ・野島一彦 (2007)、「私の心理臨床の道程：ロジャースをバックボーンとして」(収録：木之下隆夫『日本の心理臨床の歩みと未来：現場からの提言』)、人文書院。
  - ・畠瀬直子 (2006)、「訳者あとがき」(収録：カール・R・ロジャーズ、デイビッド・E・ラッセル『カール・ロジャーズ 静かなる革命』)、誠信書房。
  - ・畠瀬直子 (2007)、「訳者あとがき」(収録：カール・ロジャーズ『新版 人間尊重の心理学：わが人生と思想を語る』)、創元社。
  - ・畠瀬直子 (2012)、「人間研究センター」(収録：日本人間性心理学会『人間性心理学ハンドブック』)、創元社。
  - ・畠瀬稔、見藤隆子 (1985)、「オープニング・セッション：カールとナタリーの対話」(収録：畠瀬直子、畠瀬稔、村山正治『カール・ロジャーズとともに：カール&ナタリー・ロジャーズ来日ワークショップ』)、創元社。
  - ・畠瀬稔 (2004)、「ロジャーズとの接触から学んだこと」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
  - ・浜田和幸 (2009)、『ノーベル平和賞の虚構』、宝島社。
  - ・林延哉 (2000)、「戦後日本におけるロジャーズ理論」(収録：日本社会臨床学会『カウンセリング・幻想と現実(上)：理論と社会』)、現代書館。
  - ・東畑開人 (2009)、「先人に訊ねる日本の心理臨床学史・第3回：氏原寛先生に訊く」(収録：日本心理臨床学会『心理臨床の広場』Vol.2, No.1)。
  - ・東山紘久 (2000)、『プロカウンセラーの聞く技術』、創元社。
  - ・廣瀬幸市 (2007)、「ロジャーズ派」(収録：桑原知子『朝倉心理学講座・9：臨床心理学』)、朝倉書店。
  - ・古澤照幸 (2007)、『ニセ心理学にだまされるな!』、同友館。
  - ・保坂亨 (1998)、「『おうむ返し』という型の形式化とその流布はなぜ起きたのか?」(収録：田畑治『現代のエスプリ 374:クライアント中心療法』)、至文堂。
  - ・保坂亨、浅井直樹 (2004)、「日本におけるクライアント中心療法」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
  - ・堀淑昭、滝沢清人、中沢次郎 (1971)、『カウンセリング入門』、芸林書房。
  - ・増田實 (1998)、「パーソンセンタード・アプローチ：1960年代後半からの理論」(収録：田畑治『現代のエスプリ 374:クライアント中心療法』)、至文堂。
  - ・町沢静夫 (1992)、『成熟できない若者たち』、講談社。

- ・丸田俊彦 (2004)、「ロジャーズ・ストロウ・コフト：精神分析の立場から」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・三永恭平 (1993)、『ここを聴く：牧会カウンセリング読本』、日本基督教団出版局。
- ・見藤隆子 (2003)、「私とカウンセリング」(収録：村山正治『現代のエスプリ 別冊：ロジャース学派の現在』)、至文堂。
- ・宮崎哲弥 (1998)、『「自分の時代」の終わり』、時事通信社。
- ・無藤清子 (1983)、「エンカウンター・グループとPCA」(収録：佐治守夫・飯長喜一郎『ロジャーズ クライアント中心療法』)、有斐閣新書。
- ・村上勝彦 (2004)、『心理療法：「幕の内弁当」方式のすすめ』、アニマ2001。
- ・村瀬嘉代子 (2004)、「カール・ロジャーズ：その普遍性と孤独」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・村瀬孝雄、保坂亨 (1990)、「ロジャーズ」(収録：小川捷之、福島章、村瀬孝雄『臨床心理学大系・16 臨床心理学の先駆者たち』)、金子書房。
- ・村山正治 (1993)、『エンカウンターグループとコミュニティ：パーソンセンタードアプローチの展開』、ナカニシヤ出版。
- ・村山正治 (1998)、「晩年の考え方と実践：静かな革命家カール・ロジャース」(収録：田畑治『現代のエスプリ 374：クライアント中心療法』)、至文堂。
- ・村山正治、田畑治 (1998)、「クライアント中心療法の創始者ロジャースをめぐる」(収録：田畑治『現代のエスプリ 374：クライアント中心療法』)、至文堂。
- ・村山正治 (2005)、「パーソン・センタード・アプローチ」(収録：岡堂哲雄『現代のエスプリ 別冊：臨床心理学入門事典』)、至文堂。
- ・村山正治 (2012)、「PCAGIP法とは何か」(収録：村山正治、中田行重『新しい事例検討法：PCAGIP入門』)、創元社。
- ・村山正治 (2012)、「村山正治 心理療法について語る：教育、研究、心理療法」(収録：村山正治、中田行重『新しい事例検討法：PCAGIP入門』)、創元社。
- ・本山智敬 (2012)、「ウィスコンシン・プロジェクト」(収録：日本人間性心理学会『人間性心理学ハンドブック』)、創元社。
- ・本山智敬 (2012)、「ラホイヤ・プログラム」(収録：日本人間性心理学会『人間性心理学ハンドブック』)、創元社。
- ・森谷寛之 (2005)、『臨床心理学：心の理解と援助のために』、サイエンス社。
- ・諸富祥彦 (1997)、「思想家ロジャーズ」(収録：久能徹、末武康弘、保坂亨、諸富祥彦『ロジャーズを読む』)、岩崎学術出版社。
- ・諸富祥彦 (1997)、「人間性心理学・来談者中心療法・ゲシュタルト療法」(収録：平木典子、巖岩秀晃『カウンセリングの基礎：臨床の心理学を学ぶ』)、北樹出版。
- ・諸富祥彦 (1997)、『カール・ロジャーズ入門：自分が「自分」になるということ』、コスモス・ライブラリー。
- ・諸富祥彦 (2004)、『「クライアントセンタード」はどこへ行くのか：ロジャーズ・ルネッサンスに向けて』(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
- ・諸富祥彦 (2005)、「人間性心理学」(収録：中島義明、繁榎算男、箱田裕司『新・心理学の基礎知識』)、有斐閣ブックス。
- ・矢幡洋 (2002)、『立ち直るための心理療法』、ちくま新書。
- ・山本聡 (1990)、「ロジャーズ・スキナー論争」(収録：國分康孝『カウンセリング辞典』)、誠信書房。
- ・山本次郎 (2001)、『カウンセリングの実技がわかる本』、コスモス・ライブラリー。
- ・吉川左紀子 (2006)、「共感的対話：臨床心理学と実験心理学のコラボレーション」(収録：河合俊雄、岩宮恵子『こころの科学：新 臨床心理学入門』)、日本評論社。
- ・吉田武男、中井孝章 (2003)、『カウンセラーは学校を救えるか：「心理主義化する学校」の病理と変革』、昭和堂。
- ・吉福伸逸 (1989)、『トランスパーソナル・セラピー入門』、平河出版社。
- ・頼藤和寛、中川晶、中尾和久 (1993)、『心理療法：その有効性を検証する』、朱鷺書房。
- ・理辺良保行 (1993)、「対話」(収録：ハイメ・カスタニエダ、井上英治『新人間学』)、透土社。
- ・渡辺恒夫 (2003)、「世界心理学史：フロイトも反逆者だった」(収録：AERA Mook『新

版 心理学がわかる』、朝日新聞社。

- ・渡辺三枝子 (1996)、『カウンセリング心理学：変動する社会とカウンセラー』、ナカニシヤ出版。

#### 引用文献・訳書 (50音順)

- ・ロブ・アンダーソン、ケネス・N・シスナ [今井伸和、永島聡訳] (2007)、『ブーバー、ロジャーズ 対話：解説つき新版』、春秋社。
- ・シュー・ウォルロンド＝スキナー [森岡正芳、藤見幸雄ほか訳] (1999)、『心理療法事典』、青土社。
- ・R・I・エヴァンズ [宇津木保訳] (1972)、『B・F・スキナー：人と思想』、誠信書房。
- ・マーティン・ガードナー [太田次郎訳] (2004)、『インチキ科学の解説法：ついつい信じてしまうトンデモ学説』、光文社。
- ・マイケル・カーン [園田雅代訳] (2000)、『セラピストとクライアント：フロイト、ロジャーズ、ギル、コフートの統合』、誠信書房。
- ・アーネスト・キーン [吉田章宏、宮崎清孝訳] (1989)、『現象学的心理学』、東京大学出版会。
- ・エルマー・グリーン、アリス・グリーン [上出洋介、上出鴻子訳] (1990)、『バイオフィードバックの驚異：心は血圧までコントロールできる』、講談社ブルーバックス。
- ・スーザン・ケイヴ [福田周、卯月研次訳] (2007)、『心の問題への治療的アプローチ：臨床心理学入門』、新曜社。
- ・Kelling, George W. [伊東博訳] (2001)、「ロジャーズ、カール (ランソム)」(収録：E・ディヴァイン、M・ヘルド、J・ヴィンソン、G・ウォルシュ『20世紀思想家事典』)、誠信書房。
- ・デイヴィッド・コーエン [三宅真季子訳] (2008)、『心理学者、心理学を語る：時代を築いた13人の偉才との対話』、新曜社。
- ・フランク・ゴープル [小口忠彦訳] (1972)、『マズローの心理学』、産業能率大学出版部。
- ・ユージン・T・ジェンドリン [畠瀬直子訳] (2006)、「序文」(収録：カール・R・ロジャーズ、デイビッド・E・ラッセル『カール・ロジャーズ 静かなる革命』)、誠信書房。
- ・ローレン・スレイター [岩坂彰訳] (2005)、『心は実験できるか：20世紀心理学実験物語』、紀伊國屋書店。
- ・ブライアン・ソーン [岡村達也、林幸子、上嶋洋一、山科聖加留訳] (2000)、「スピリチュアルな訓練法を開発する」(収録：デイブ・メアーンズ『パーソンセンタード・カウンセリングの実際：ロジャーズのアプローチの新たな展開』)、コスモス・ライブラリー。
- ・ブライアン・ソーン [上嶋洋一、岡村達也、林幸子、三國牧子訳] (2003)、『カール・ロジャーズ』、コスモス・ライブラリー。
- ・キース・チューダー、トニー・メリー [小林孝雄、羽間京子、箕浦亜子訳] (2008)、『ロジャーズ辞典』、金剛出版。
- ・W・ドライデン、J・ミットン [酒井汀訳] (2005)、『カウンセリング／心理療法の4つの源流と比較』、北大路書房。
- ・ロバーツ・D・ナイ [河合伊六訳] (1995)、『臨床心理学の源流：フロイト、スキナー、ロジャーズ』、二瓶社。
- ・スーザン・ノーレン・ホークセマ、バーバラ・L・フレデリックソン、ジェフ・R・ロフタス、ヴィレム・A・ワーグナー [内田一成訳] (2012)、『ヒルガードの心理学 第15版』、金剛出版。
- ・キャンベル・パートン [日笠摩子訳] (2006)、『パーソン・センタード・セラピー：フォーカシング指向の観点から』、金剛出版。
- ・S・パルマー [島悟訳] (2001)、『ガイドブック 心理療法』、日本評論社。
- ・R・P・ファインマン [大貫昌子訳] (2000)、『ご冗談でしょう、ファインマンさん (下)』、岩波現代文庫。
- ・アン・フーバー、ジェレミー・ホルフォード [鈴木義也訳] (2005)、『初めてのアドラー心理学』、一光社。
- ・ジェームズ・W・ペネベーカー [余語真夫訳] (2000)、『オープニングアップ：秘密の告白と心身の健康』、北大路書房。
- ・カール・I・ホヴランド、他 [辻正三、今井省吾訳] (1960)、『コミュニケーションと説得』、誠信書房。
- ・ジョン・ホーガン [竹内薫訳] (2000)、『続 科学の終焉』、徳間書店。
- ・エドワード・ホフマン [岸見一郎訳] (2005)、『アドラーの生涯』、金子書房。
- ・パトリック・ライス [畠瀬稔、東口千津子訳] (2003)、『鋼鉄のシャッター：北アイルランド紛争とエンカウンター・グループ』、コスモス・ライブラリー。
- ・老子 [蜂屋邦夫訳] (2008)、『老子』、岩波文庫。
- ・カール・R・ロージャーズ、ロザリンド・F・ダ

- イモンド [友田不二男訳] (1961)、『人格転換の心理』、岩崎書店。
- ・カール・R・ロジャーズ [小野修訳] (1966)、『ロジャーズ全集・1：問題児の治療』、岩崎学術出版社。
  - ・カール・R・ロジャーズ [手塚郁恵訳] (1967)、『ロジャーズ全集・11：復員兵とのカウンセリング』、岩崎学術出版社。
  - ・カール・R・ロジャーズ [村山正治訳] (1967)、「自己が真の自己自身であるということ：人間の目標に関するセラピストの考え」(収録：カール・R・ロジャーズ『ロジャーズ全集・12：人間論』)、岩崎学術出版社。
  - ・C・R・ロジャーズ、B・F・スキナー [村山正治訳] (1967)「人間行動の統制に関する二、三の問題点：シンポジウム」(収録：カール・R・ロジャーズ『ロジャーズ全集・12：人間論』)、岩崎学術出版社。
  - ・カール・ロジャーズ [畠瀬稔、畠瀬直子訳] (1982)、『エンカウンター・グループ：人間信頼の原点を求めて』、創元社。
  - ・カール・ロジャーズ [村山正治、村山尚子訳] (1982)、『結婚革命：パートナーになること』、サイマル出版。
  - ・カール・ロジャーズ [畠瀬直子訳] (1984)、「46年を回顧して」(収録：カール・ロジャーズ『人間尊重の心理学：わが人生と思想を語る』)、創元社。
  - ・カール・ロジャーズ [村山正治訳] (2001)、「私を語る」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(上)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [村山尚子訳] (2001)、「私の結婚」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(上)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [伊東博訳] (2001)、「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(上)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [村山正治訳] (2001)、「症例 エレン・ウェストと孤独」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(上)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [村山正治訳] (2001)、「クライアント・センタードの枠組みから発展したセラピー、パーソナリティ、人間関係の理論」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(上)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [伊東博訳] (2001)、「十分に機能する人間：よき生き方についての私見」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集(下)：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
  - ・C・R・ロジャーズ [末武康弘、保坂亨、諸富祥彦訳] (2005)、『ロジャーズ主要著作集・1 カウンセリングと心理療法：実践のための新しい概念』、岩崎学術出版社。
  - ・C・R・ロジャーズ [保坂亨、諸富祥彦、末武康弘訳] (2005)、『ロジャーズ主要著作集・2 クライアント中心療法』、岩崎学術出版社。
  - ・C・R・ロジャーズ [諸富祥彦、末武康弘、保坂亨訳] (2005)、『ロジャーズ主要著作集・3 ロジャーズが語る自己実現の道』、岩崎学術出版社。
  - ・カール・R・ロジャーズ、デイビッド・E・ラッセル [畠瀬直子訳] (2006)、『カール・ロジャーズ 静かなる革命』、誠信書房。
  - ・カール・ロジャーズ [畠瀬直子訳] (2007)、『新版 人間尊重の心理学：わが人生と思想を語る』、創元社。
  - ・リチャード・ワイズマン [木村博江訳] (2010)、『その科学が成功を決める』、文藝春秋。
  - ・T・W・ワン [村山正治訳] (1980)、『行動主義と現象学：現代心理学の対立する基盤』、岩崎学術出版社。

引用文献・英書（アルファベット順）

- American Psychiatric Association(1993), Psychosocial treatment research in psychiatry: A task force report of the American Psychiatric Association, Washington, DC: Author.
- Cohen, David(1997), Carl Rogers: A critical biography. London: Constable and Company.
- Hayes, Nicky(2004), Psychology, UK: Hodder & Stoughton.
- Hunt, Morton (2007), The story of psychology, New York: Anchor Books.
- Kirschenbaum, H & Henderson, V. L. (Eds.),(1989), The Carl Rogers reader. Boston: Houghton Migglin.
- Kirschenbaum, Howard & Henderson, Valerie Land (1990), Carl Rogers: Dialogues, London: Constable.
- Raskin, N. J.(1974), Studies of psychotherapeutic orientation: Ideology and practice, Research Monograph 1, American Academy of Psychotherapists.
- Rogers, Carl(1959), A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch(Ed.), Psychology: A study of a science, Vol.3, New York: McGraw-Hill.
- Sharf, Richard S.(2000), Theories of psychotherapy and counseling: Concepts and cases, Belmont: Wadsworth/Thomson Learning.
- Skinner, B. F. (1974), About behaviorism, New York: Vintage Books.
- Skinner, B. F. (1983), A matter of consequences: Part three of an autobiography, New York: Knopf.

